

第4回 古代歴史文化講演会

講演録

刀
剣

が
語る

古代国家誕生



令和元年

日時

12月22日[日]

会場

明治大学アカデミーホール

開会あいさつ

【司会：山田】 皆様、本日は第4回古代歴史文化講演会「刀剣が語る 古代国家誕生」にご来場いただき、誠にありがとうございます。私は、本日の進行役を務めます、埼玉県立さきたま史跡の博物館の山田琴子と申します。どうぞよろしくお願いたします。では、講演会開会にあたり、主催者を代表して奈良県地域振興部次長、建石徹よりご挨拶を申し上げます。建石次長、お願いします。

【建石】 皆様こんにちは。ご紹介にあずかりました、奈良県の建石と申します。本日は年末のお忙しい中、お越しいただきありがとうございます。今回は、明治大学古代学研究所所長の石川日出志先生はじめ、明治大学の先生方、関係の皆様方のご厚意によりまして、明治大学と共催で、この素晴らしい会場で講演会を開催させていただくことになりました。この場をお借りして御礼申し上げます。この講演会を主催する古代歴史文化協議会は、古代歴史文化に関心の深い、いわば古代自慢の14県の知事が集まりまして、平成26年11月に発足したものでございます。平成26年から平成30年度まで、「古墳時代の玉類」をテーマに共同調査研究を行い、その成果を江戸東京博物館と九州国立博物館で開催した展覧会で公開しまして、11万人の皆様にお越しいただきました。また、成果をまとめた書籍も刊行しました。



今年度からは第2期といたしまして、「古墳時代の刀剣類」をテーマに、引き続き共同で調査研究活動を進めております。したがって、今回の講演会は新しいテーマとして最初の講演会ということになります。14もの県が広域で連携をしながら、古代歴史文化について調査研究を行うというのは、おそらくこれまでにない試みだろうと、私どもも自負しており、重要なことだと思っております。それによりまして、今までは個々の県で、或いはある特定の地域で行っていた、それぞれの調査研究では見えてこなかったような、色々なことに気付くということが、期待される訳です。

来る2020年は東京オリンピック・パラリンピックの年でございますが、日本書紀が完成して1300年という年でもあります。この年に、国内外で日本という国の成り立ちや、古代の歴史文化に対する関心は、さらに高まってくるものだと思っております。このような中で皆様の、古代歴史文化への興味関心をさらに深めていただき、或いは広げていただくために、14県の共同研究調査等で得られた成果を伝えさせていただきたいと思っております。今日この場を作らせていただいたところです。

この後、滋賀県立大学の金宇大先生にご講演をいただきます。その後、金先生と、明治大学の若狭徹先生にもご出演いただきまして、各県の研究担当者と一緒にパネルディスカッションをさせていただきます。私も非常に楽しみにしているところです。今日の成果も踏まえまして、今後、これから数年間の調査研究の成果をまとめて、書籍や展覧会にして、また皆様にお届けできることを計画しております。毎年の講演会も計画して参ります。

このような活動を通じまして、皆様の、古代歴史文化への興味関心が一層高まること、そして私どもの研究が深まること、広がること、その両方を期待して、主催14県を代表してのごあいさつとさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

【山田】 建石次長、ありがとうございました。

それではこれより、基調講演をお聞きいただきます。講師は、滋賀県立大学准教授、金宇大先生です。先生は、古墳時代の金工品がご専門で、日本国内だけでなく朝鮮半島出土の耳飾や刀剣類について、幅広く研究をされていらっしゃいます。京都大学大学院博士課程を修了され、奈良文化財研究所、京都大学白眉センター特定助教を経て、今年4月から現職に就かれたばかりの気鋭の若手研究者でいらっしゃいます。今日は「刀剣から読む古代朝鮮と倭」と題し、朝鮮半島と古代日本の関係を、刀剣の製作技法を手がかりに解き明かしていただきます。それでは金先生、よろしくお願いたします。

基調講演

「刀剣から読む古代朝鮮と倭」

金 宇大 (滋賀県立大学人間文化学部准教授)

はじめに

ただいまご紹介にあずかりました、金宇大と申します。本日はよろしくお願いいたします。こんなに大勢の方の前でお話させていただく機会はなかなかございませんので少々緊張していますが、是非ともよろしくお願いいたします。それでは早速、話を始めていきたいと思えます。

ご存じの方が多いとは思いますが、今からお話する古墳時代がどういう時代か、最初に簡単に説明させていただきます。日本の全国各地で古墳が大量に作られた「古墳時代」は、人によってはちょっと理解が違ったりしますが、だいたい3世紀半ばから7世紀に当たる時期だと言われています。特に、前方後円墳という特徴的な形の古墳が、南は鹿児島から北は岩手まで、日本全国に築かれたということがすごく大きな特徴だと思います。日本史の教科書的なイメージでは、飛鳥時代ぐらいからは聖徳太子だとか小野妹子だとかの具体的な印象があるんですが、古墳時代っていうとなんだか原始時代みたいなイメージがあるかもしれません。しかし、全国で古墳は16万基以上あると言われています。1000基や2000基じゃないんですね。前方後円墳だけでも5000基ぐらいあるといわれています。このことって、実はものすごいことなんです。前方後円墳という形の古墳がこの広い日本全国に一律に作られるというのは、それだけのことを可能にする社会が既に、この時代に成立していたことを端的に示しています。



今年、世界遺産に認定された百舌・古市古墳群の大仙陵古墳(仁徳天皇陵古墳)を、実際に当時の工法で作るとどのくらい大変なのか、建設会社の大林組が試算したことがあります。それによると、当時の作り方で1日に2000人が8時間、月25日働いて、大体15年8ヶ月、総工費796億円かかるとされています。そんなことが可能な時代だったと考えれば、ものすごい社会が既に成立していたことがわかるわけです。

古墳の中には、いろんな副葬品が埋められています。前期には銅鏡や石製の腕輪といった、呪術者・シャーマン的な性格のものが副葬されていたのが、だんだんと武人的なものに変わり、後期になるときらびやかな馬具や、キンキラキンの刀が出てくるようになるわけです。今日は、この刀剣という副葬品を扱っていきたいと思っています。

刀というとやはり侍が持っている日本刀のイメージがありますが、古墳の中に埋まっている刀剣というのは、錆びてボロボロになってしまっている、反りがなくてまっすぐな、いわゆる「直刀」と呼ばれる刀が一般的です。日本刀は刃紋が美しいですが、古墳の中で土に埋もれているので出土した時には錆びてボロボロになってしまっています。あまり美しい刀とは言えないですが、これを紐解いていくと社会がよくわかってくるのです。朝鮮半島や中国では騎馬文化が発達していて、柄の長い武器がメインになります。一方で日本では、大量の刀剣を副葬している。古墳時代の段階で、その後、侍の命となるような「刀」に対する精神的基盤ができてきたのかもしれない。

今回のお話では、金や銀で装飾を加えた、装飾付大刀を扱ってまいります。まず、古墳時代の多様な装飾付大刀の意義、どんな装飾付大刀があり、それを研究すると何がわかるのか、ということをお話します。次に、中国や朝鮮半島から入ってきた装飾付大刀と、日本の資料をどのように比較できるのか、そして、日本の中でどのように定着していくのか、お話します。この話は非常に細かい、めちゃくちゃマニアックなお話になるかと思いますが、そもそも考古学をやっている人というのは、基本的にマニアックな、オタクみたいな人がほとんどです。ので、いかにオタクな研究が展開するかというところを聞いていただければと思います。

古墳時代の多様な「装飾付大刀」とその意義

では、古墳時代の多様な装飾付大刀とその意義、という点からお話を始めます。古墳時代は前期・中期・後期と三つに分けて考えられています。大体、前期が3世紀半ば～4世紀の後半、中期が4世紀後半～5世紀いっぱい、後期が6世紀～7世紀と言われています。その中でも、後期の6世紀後半ぐらい、古墳時代の中でもかなり後の方になって、装飾付大刀がたくさん出土するようになります。装飾付大刀と一言と言っても、実はものすごくたくさんの種類があります。面白いのは、分布に偏在性があるんですね。ある刀はある地域にすごく集中していて、一方、別のもは別のところに分布する、そういう現象をいかに考えていくかというのが面白いところです。

装飾付大刀にはいろんな種類があります。柄にトランプのクローバーみたいなのがつく三累環頭大刀、柄の環の中に龍がいる単龍環頭大刀、二匹の龍が入る双龍環頭大刀、中に鳳凰がいる単鳳環頭大刀。他にも、獅噛環頭大刀、象嵌円頭大刀、頭に玉ねぎみみたいな飾りがついている頭椎大刀など、本当にたくさんの種類のものがあります。お気づきいただけと思いますが、この時代の刀は刃がボロボロになってしまっています。どこで種類分けをするかという、グリップエンドの部分、これを柄頭と言いますが、この部分の種類で分類しています。

装飾付大刀が本当に武器なのか、という点は、今日のお話の重要なポイントになってまいります。韓国慶州の、新羅の王様の墓が集まったところにある天馬塚の復元展示ですが、亡くなった人物に装着した状態で様々なアクセサリが出土しています。刀は遺体の脇に置かれています。このように見ますと、この刀で敵と戦うというようなイメージではなくて、権力者が全身をきらびやかに飾った装身具の中の一つに、装飾付大刀がある、というように見ることができます。

倭の古墳時代、5世紀以降の古墳には甲冑が大量に副葬されるようになりますが、これらも戦うためのものだったかどうかは、なかなか難しい。宮内庁の三ノ丸尚蔵館の所蔵品には、出土地不明ですが金ぴかの「衝角付冑」と呼ばれる兜がありますし、大仙陵古墳の前部からも金ぴかの甲冑が出土したと言われています。敵と戦うのにこんな金ぴかの鎧をわざわざ着る必要があったのでしょうか。私は、こうした鎧は半ば装身具のような機能を持つものだと考えます。七観古墳から出土した短甲は、腰に龍文透の飾りがついたベルトが付いています。武器、武具というのは、有力者の装い、装身具と表裏一体だということがわかるわけです。

そういったシンボリックな要素があるということを踏まえた上で、なぜ古墳時代に多種多様な装飾付大刀が出土するのか、という問題を考えてみたいと思います。一つの理由として考えられるのは、朝鮮半島など様々な地域からの舶載品が混じって出土しているのでは、という見方です。朝鮮半島と一言と言っても、百済とか新羅とかいろんな地域がありますから、いろんな地域からもたらされたものが一緒に見つかったのではないかと、という説です。装飾付大刀には複数の系統があり、それぞれ来歴が違います。次頁図の右側は日本で作られた伝統的な大刀、左側は倭国の外から入ってきたもの。これが混ざってくるので混迷をきわめておりまして、さらには両者の折衷型、というものも出てくる。朝鮮半島で作られた大刀が運ばれたのか、工人が日本に移動して作ったのか、様々なケースが想定され、ややこしい状況になっているわけです。

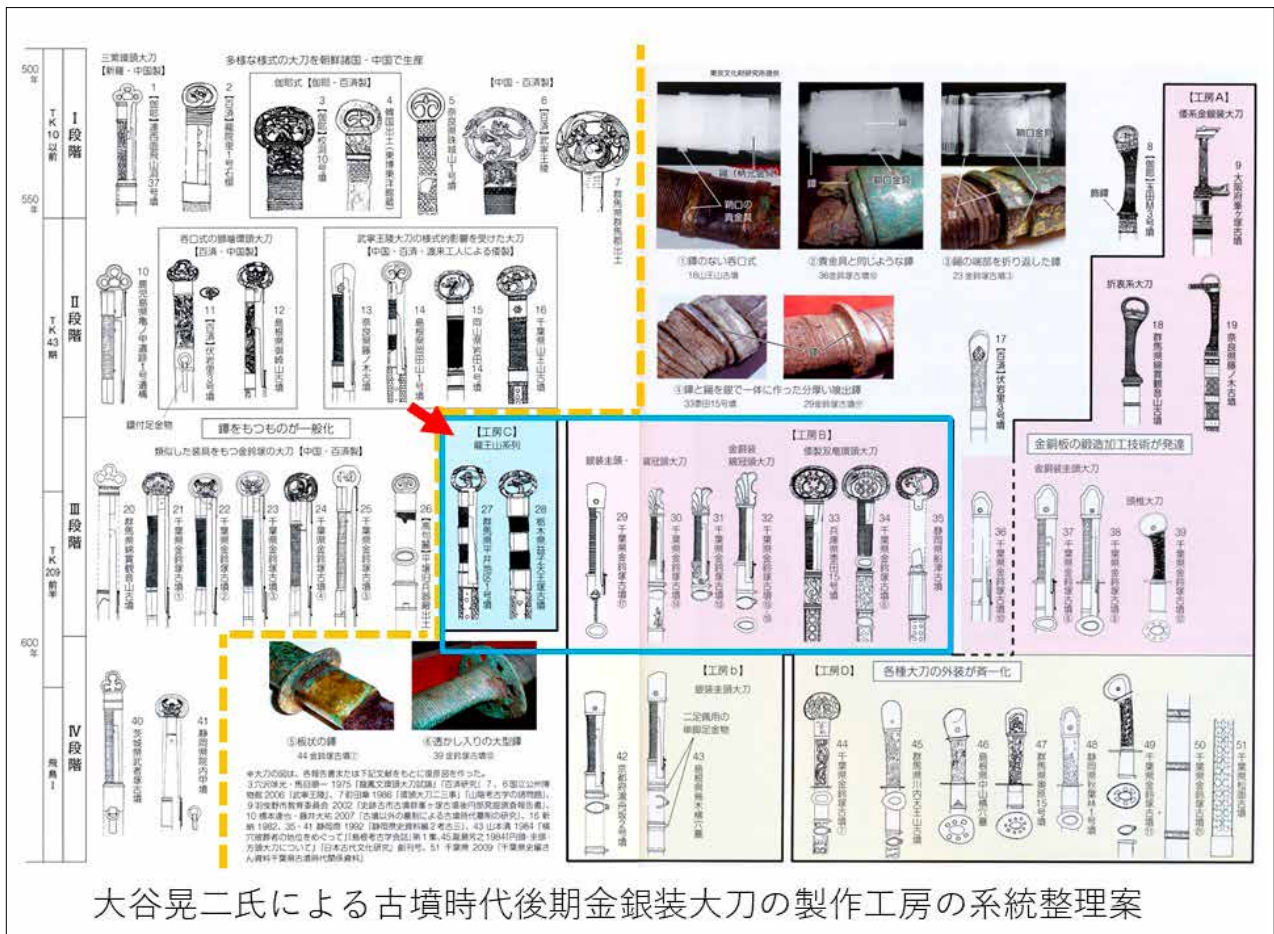
また、大刀は特定の生産地で作られてあちこちに配られているという前提でお話ししていますが、実際のところ



は地方でそれぞれオリジナリティーのある大刀を作っていたのではないか、という議論もあります。もしそうだとしたら、特定の地域に特定の大刀が出土する、という現象も説明できる有力な仮説にもなり得ます。しかし、大刀を作るのは簡単ではありませんので、これを地方で独自につくることが果たしてできたのか、また、ヤマト王権の中核勢力を介さずに地方同士で大刀を直接やりとりすることがあったのか、解決しないといけない問題がたくさんあります。

さらに、もしかしたら多種多様な装飾付大刀は、それぞれに何らかの意味が込められているのではないか、実は意図的に作り分けられていて、政治的に配り分けがなされていたのではないか、という可能性があります。例えばある特定の仕事、役割を持っている人にこの刀を渡そう、というような、議員バッチみみたいな役割がなかったか。あるいは特定の大刀を特定の氏族、例えば蘇我氏や物部氏に結びつけるような議論もあります。これは考古学的に論証していくのが難しい問題ではありますが、ある地域に力を持っている氏族が特定の大刀を配ったんじゃないか、という考えは、すごく面白くて魅力的な学説だと思います。

このように、なぜ多種多様な装飾の大刀があるのかという問いを解決すれば、古墳時代の対外関係ですとか、社会構造の変遷プロセスを明らかにできるのではないかと考えるわけです。そのためにはまず、先に挙げたような様々な可能性を検討していく必要があります。私は古墳時代の朝鮮半島との関わりという点に興味がありますが、それを知ろうと思ったら、先ほど紹介した様々な種類の大刀をどういう技術で作っているのか、朝鮮半島の資料と比較していく細かい作業が必要になってまいります。



半島各地の装飾付大刀と日本列島への流入

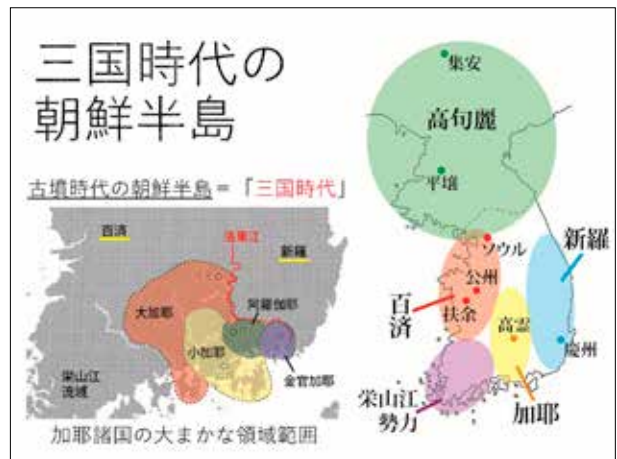
次に、朝鮮半島各地の装飾付大刀と、日本列島への流入という問題を考えてみます。朝鮮半島の三国時代の「三国」とは、高句麗、百濟、新羅を指します。また、加耶地域、昔は「任那」と呼ばれ日本が直轄の領土としていたと言われた時期もありますが、その後の調査研究の進展によって、日本の古墳社会とは異なる文化を持つ社会であったことがわかっています。しかも、新羅や百濟とも違う存在であったこともわかっています。ただし加耶というのは連合体でして、大加耶や小加耶、阿羅伽耶や金官加耶といった、小国の連盟になっています。今日、特にお話に出てくるのは大加耶です。加耶の中でも非常に大きな力を持っていました。一時的には百濟、新羅にも劣らないぐらいの勢力でした。

朝鮮半島で出土する装飾付大刀は、基本はグリップエンドに環状の飾りがついた、いわゆる「環頭大刀」と言わ

れるものです。新羅では三累環頭大刀や三葉環頭大刀が主流ですが、百済では龍鳳環頭大刀が主流で、それぞれのデザインは国ごとに違う。大加耶でも龍鳳環頭大刀がありますが、ただ中の顔がちよっと違う。このように朝鮮半島の地域色は日本よりも明確です。こうした大刀が5世紀の間にワーンと作られて、6世紀になると一気に減ってしまいます。それは、朝鮮半島では6世紀になるとあまりお墓に物を入れなくなるということが大きな原因でして、実際に刀をつくらなくなったのか、ただ見つかっていないだけなのかは判断が難しいところです。

一方の日本で、5世紀代に一般的だったという刀剣はというと、木や鹿の角で作った装具を取り付けたものです。

楔形の柄頭ですとか、把の縁に突起がくっついたような独特の装具をもつ剣や刀がありました。これらには直弧文という不思議な幾何学模様が入っています。これは古墳の石棺や埴輪に見られる文様です。ひょっとしたら直弧文が入った刀剣も、葬送に関する儀式と何か関係があるのかもしれない。では、朝鮮半島のような装飾付大刀がまったく無いのかというと、いくつかは出土していますので、紹介していきたいと思います。日本列島で出土した5世紀の装飾付大刀は、ほぼ全部が環頭大刀です。数もあまりありません。つまり、この時期のものは基本的に、朝鮮半島から舶載されてきたもの、搬入されたものだと考えられます。例えば、三累環頭大刀は朝鮮半島の東南部、蔚山や釜山の方で類例がたくさんありまして、日本出土のものと同じものが見つっています。ですから、その辺りからおそらく持ち込まれたとみていいでしょう。釜山のあたりが新羅なのか加耶なのか、という問題はなかなか結論がでないのが難しいですが、それはともかく、こういったピンポイントの交流をうかがえるわけです。



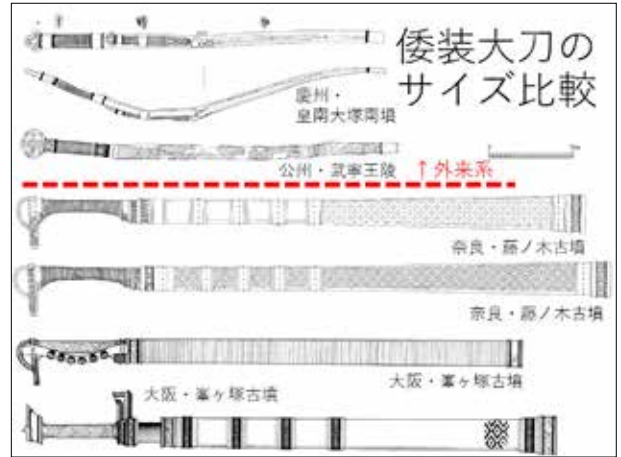
一方で、よくわからない資料もあつたりします。伝福井県疋田出土とされる大刀は、柄にC字形の模様が並んだような装飾が施されています。朝鮮半島ですと、同様の装飾は新羅でたくさんみられますが、環頭に象嵌するという特徴、これはどっちかという百済のものなんですね。朝鮮半島でもこうしたものはありますが、阿羅伽耶の咸安馬甲塚という、ちょっと不思議なところから出土している。このような折衷されたものをどう評価するか、というのは難しい問題です。

5世紀前半はどっちかと言えば新羅とか加耶から来ているものが多いのですが、5世紀後半になりますと、百済からやってくるものが多くなります。宮山古墳の大刀がなぜ百済産とわかるかといいますと、細かい話なんですけど、鉄に金を貼り付ける方法が共通します。鉄に金を貼り付けるのって難しいんですね。宮山古墳の場合は、細かい凹凸をつけて荒らしておいて、その上に薄い金をぐっと押し付けて引っかける、そういう方法で作ってるんです。これ、すごく特殊な作り方をして、こういう作り方をしているのは朝鮮半島でも百済しかない。宮山古墳の大刀のデザインは非常に珍しいもので、日本・朝鮮半島ふくめてこれ一例しか知られてないんですが、詳しい作り方を細かく見ていくと、系譜がわかってくる、というお話です。

6世紀になると数が増えて、いろんなところから大刀が入ってくるようになります。6世紀前半はまだ朝鮮半島から来てるのがほとんどで、新羅からのものがまた出てくるようになり、大加耶からのものがみられるようになってくると、時期が変わっていくと交渉主体も変わり、刀の由来場所もいろいろ変わっていきます。ただこの

時期もやっぱり、朝鮮半島に似たような資料はあるけども、どこから来たのか決めがたい資料があって、早い時期、5世紀代から6世紀前半までの装飾付大刀の研究はまだまだ深めていく余地があるなどと思います。

一方で、先ほどの楔形の柄頭がついた伝統的なデザインの大刀が日本で発達していった、装飾付大刀になったものがあります。これらを倭装大刀といいます。環頭大刀などとは別系統で、6世紀代に外来の装飾付環頭大刀と並存する刀になります。こういう別系統の刀も独自に展開してくるので、結果としてすごく複雑な様相を呈するんですね。



倭装大刀の大きな特徴は、外来の刀と比べてめちゃくちゃでかい点です。こんなに長い刀になると、さすがに佐々木小次郎でも振り回せません。このような刀は、実用品としての機能を超えて、見せるためのシンボルとして発達してきたものと解釈できます。そして古墳時代後期後半になりますと、さらに多種の装飾付大刀が出てくるようになる、以上が古墳時代の装飾付大刀の大きな流れです。

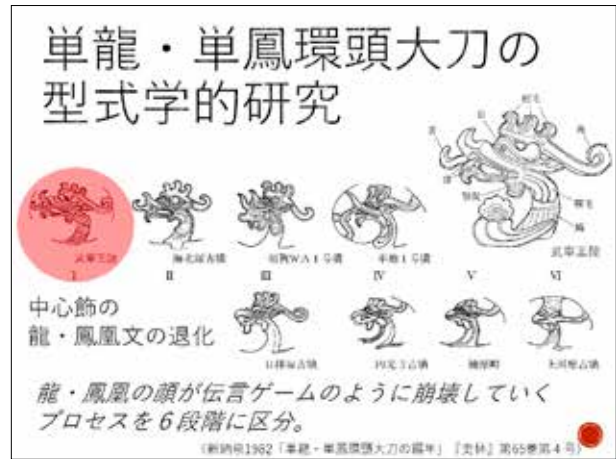
日本列島での装飾付大刀製作の定着と拡大

ここからは、単龍鳳環頭大刀に着目して、私が今回一番したかったとってもマニアックなお話を、じっくりと、していきたいと思っております。単龍鳳環頭大刀というのは、柄頭の環体の中に、1匹の龍または鳳凰が入っているものです。珍しい刀かと思いきや、日本全国で何と200点近く出土しています。すごくメジャーな刀なんです。古墳時代後期では一般的な種類で、数ある装飾付大刀の系統の中でも、外来系の代表となっていきます。私の研究の興味関心は、当時、朝鮮半島の各地とどんな関係を結んでいたか、どんな交流の中でこのような大刀が入ってきたのか、という点にありますので、朝鮮半島との関係性を読み取ることができるこの種の刀を詳しく見ていこうとしています。

龍というのは口を上下に開いて、舌を出しています。鳳凰は口がくちばし状になっていて、玉を噛んでいたり、口を閉じていたりしている。なぜこれが龍でこれが鳳凰なのかというと、先学の先生方が便宜的にそう決めたからです。私はただ黙ってそれに従っております。ちなみに龍が2匹入っていると、双龍環頭大刀です。鳳凰2匹の双鳳環頭大刀は数が少ないです。

単龍環頭大刀の龍をよくよく見ますと、結構ちゃんと細かいところまで作り込んであるんですね。後で説明しま





基調講演

すが、細かい要素は時期が下っていくとだんだんいい加減になっていきます。今回、この製作技法、作り方というマニアックなところに着目して、分析していきます。

上の写真の単龍環頭大刀は、韓国公州の武寧王という百済の王様の墓から出土したものと、岡山県岩田14号墳から出土したものです。一見して、明らかに似ている。誰が見ても両者には何かの関係があると思えます。それで、日本で出土しているこのような大刀は百済と何か関係あるんじゃないかというような話が、かねてよりなされてきたわけです。武寧王陵とは、朝鮮半島の西南部にあった百済の第25代の王様のお墓です。1971年に奇跡的に盗掘を受けてない状態で発見されました。宋山里古墳群という百済の王陵の中にあり、他の古墳はことごとく盗掘されていたんですが、武寧王陵だけは盗掘を受けておらず、そして日韓の古墳で唯一、墓誌が出土しています。日本にも韓国にも古墳はたくさんあるんですけども、誰のお墓か分かっているのはこれしかない。日本にも「仁徳天皇陵古墳」などがありますが、100%仁徳天皇の墓だと判明しているというわけではありません。しかし、武寧王陵だけは、墓誌に62歳で亡くなった斯麻王、つまり武寧王が葬られたことがきちんと書かれている。なぜここだけ墓誌があるかというと、武寧王陵は百済でも珍しい「塼室墓」というレンガを敷き詰めて部屋を作る、中国南朝で使われる墓制が採用されています。中国では墓誌を入れる習慣があるんですが、百済の武寧王陵は中国南朝とかなり親しくしていて、自分の墓も中国風にしたんです。その結果、この人のお墓だということがわかり、しかも523年に死んだということまではっきりわかっているという、すごく重要なお墓です。そこから単龍環頭大刀が出土しているというのが重要なポイントになります。日本の単龍環頭大刀は、出土地のわからないものも含めると、200近くの出土例が知られていますが、それらは「型式学」、要するにどれが古くてどれが新しいか、という視点から研究されてきました。それによると、武寧王陵のものは古い時期のもので、細部までしっかり作り込まれています。それが新しいものになるにつれて、だんだんいい加減になっていく。龍の形が最後の方はもうぐちゃぐちゃになって、もはや龍の頭が溶けて環とくっついてしまっています。時期が下っていくにつれ伝言ゲームのように崩壊していくのはなぜかという、やはり最初は朝鮮半島の方の、龍の概念を直接知っている人たちが製作に関わっていたのですが、日本の職人さんに作り方を伝えていく中で、龍のことを直接わかっていない人が見よう見まねで作っていくと、例えば龍の歯を入れるのを忘れて、大体いい加減になっていくんですね。ここでポイントとなるのは、単龍鳳環頭大刀全体の中で一番古いものが、今のところ武寧王陵出土のものだとされている点です。つまり、日本で出土する単龍環頭大刀のプロトタイプが、武寧王陵の資料だと考えられるのです。武寧王陵の大刀の存在から、単龍環頭大刀は最初、百済から伝来し、それがやがて日本の中で作られるようになるのだけど、龍の細かいパーツについての知識が次第に失われていき、つくりがいい加減になっていく、と理解するのが、通説的な考え方になっています。でも、本当にそれらは百済から来ているのか、ということのマニアックに検討したのが今日のお話になります。柄頭の作り方を細かく見ていきましょう。

考古学の実際の調査・研究では、発掘調査のほかにも、出土したものが保管されている博物館や調査機関までわざわざ出向いて、実物を出してもらって直接観察するという「資料調査」というのが重要なプロセスとなります。韓国まで行って、武寧王陵の大刀を直接観察してまいりました。やっぱり近くで見ると、その緻密な作りがよくわかります。本当に細かいところまで作り込まれているんですね。龍の文様もしっかり高低差のある浮き彫りで表現されている。どうやって金の発色を出しているかというと、先ほどの宮山古墳例のように小さな凹凸をつけて上から金を押し付けるというのとは根本的に違って、「鍍金」という方法が用いられています。まず金を、人体に非常に有毒な物質、「水銀」に溶かします。金を溶かした水銀のことを「金アマルガム」というんですが、それを銅の上に塗っていきます。全体に塗ったら、加熱して水銀を蒸発させ飛ばしてしまいます。すると、溶けていた金がそこに定着する。これが金鍍金（メッキ）です。一方の、岡山県岩田14号墳のものを細かく観察してみますと、

確かにかなり立体的な作りになっていて細かい意匠がしっかり表現されています。ただ、よく見るとところどころ金が破れた箇所がある。これは、環に上から薄い金の板を被せてあったのが、一部破れてしまった痕跡です。先ほどの鍍金とは異なる作り方になっています。つまり、文様は似ていますが岩田14号墳の大刀は、環の作り方が武寧王陵の大刀と違うんです。

ところで、古代の金工技術を復元するのは、とても難しいことです。考古学をやっている人は、ものづくりの専門家ではない。ですので、出土品をみてこうやって作るんじゃないかと推測しても、それが合ってるとは限らないわけです。以前、三重県坂本1号墳出土の頭椎大刀の復元品を作るというプロジェクトがありました。立体的な丸い形をしている柄頭の部分を作る際に、考古学的な観察所見をもとに、「半球形の木の台に銅板をあてがって、叩いて整形することで2枚の半球形の部品をつくり、これらを組み合わせる」という製作工程を推定しました。しかし、この工程案を実際に復元製作を担当していただく金工職人さんにお伝えしたところ、職人さんは実物をぱっと見て、「こんなもん、台なんか無くても作れる」と言って、金づち一本でカンカン叩いてあつという間に作ってしまったんです。つまり、私たちが感覚で難しそうだなと思っても、実際作ってる人にとってはそうでもないということが結構あるわけです。考古学をやっていると、ついつい「こうやって作る方が合理的だ」と、そういう基準で考えがちです。有名な七支刀の復元製作実験をされたある鋳物職人の方の話なんですけど、その方は必ず2時に鑄造の作業をする。なぜ2時にやるんですか、と聞いたら「とにかく2時に作らないといいものがない」んだそうです。実際、2時にやらないとうまくいかなかった、ということが起きてくるので、それは本当に職人さんの感覚なんですけど、ものづくりというのはそういうものなんだろうなと。考古学で考えたら、2時に作ってるかどうかなんて絶対わかんないんですけど、でも、必ずしも物事は合理的に進められるわけではないんだ、ということを念頭に置かないといけない。だからその辺りを適当に考えたらすごく危険だということになるわけです。私がお世話になっている、鈴木勉さんという先生、この方は復元品をずっと作りながら、物づくり、当時の技術復元というのに取り組んでおられるんですけど、その方が警鐘を鳴らしています。考古学をやっている人は、「観察推定法」で物事を考える、と。観察して、こういうふうに乗ってるんじゃないかという推定をし、その推定によって復元した作り方を、絶対にそうだと信じてしまう危険がある。しかし、それはあくまで推定にすぎないんじゃないか。本当は、「検証ループ法」といって、こうやって作ったらできるんじゃないかと推定した方法で、実際に復元品を作ってみる必要がある。できてきた完成品と、実際の出土品を比較してみることで、推定した方法が本当に妥当なのかを確かめないとけない、とおっしゃるんですね。推定は推定にすぎず、合ってるかどうかかわからないんだっていう意識を持つておくことが必要だというわけです。

そこで、実際に検証ループ方でやってみた、という事例を紹介させてください。さっきよりもさらに細かい話になります。岩田14号墳の大刀なんですけど、これ、よくよく観察しますと、環の側面に何か変な痕跡があることがわかります(写真下左)。直線上に何か筋が入っていて、文様のでこぼこを乗り越えて続いている。これは一体何だろうということから研究が始まりました。先ほどの百済の武寧王陵の大刀を細かく見ても、そんな筋みたいなのは確認できません。そもそも岩田14号墳の大刀にしかこの筋はないんじゃないか、という可能性も考えましたが、日本で出土する最も古い一群の資料には、やはり、同様にこの痕跡がついてるんです(写真下右)。一番古い資料群はどれも、岩田14号墳の大刀のように、環を鍍金ではなく薄い金の板を被せて作るので、被せた金の板の上下の端が、ここで重なって筋状に見えるのではないかと考えました。しかし見ていくと、線がたまに途切れたりするんですね。となると、この直線状の痕跡の正体は一体何なのでしょう。



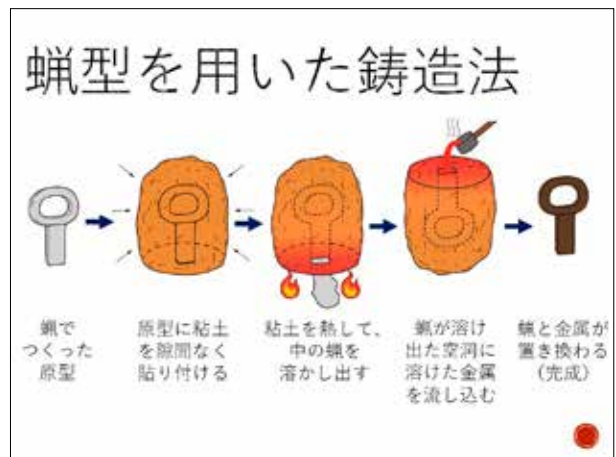
山畑 48 号墳の単鳳環頭大刀はもう少し新しい段階の、鍍金で作られた資料です。鳳凰の顔の側面を見ると、ごくうっすらとありますが、筋がついているのを確認できます。どうしてこういう痕跡が残るのか。合わせ鋳型で七支刀の鋳造実験を行った際のことなのですが、鋳上がった七支刀の刃の部分に薄い出っ張りが生じていました。二つの鋳型を合わせて、その隙間に溶けた鉄を流し込むと、鋳型の合わせ目のところから少し溶けた金属がはみ出て固まり、それが薄い出っ張りとなっていたのです。これをバリと言います。バリは最終的には綺麗に除去しますが、完全に取りきれなかった時に、ちょっとだけ筋状の痕跡が残るということが考えられるわけです。

一方で、岩田 14 号墳の龍の首元にあるナイキのロゴマークみたいな雲気の飾りを見てみましょう。これはなかなか凝った作りになっていて、表面の雲気と裏面の雲気の間に隙間があるんです。実は、こんな隙間がある構造は、七支刀の実験で使ったような合わせ鋳型では作ることができないんです。例えば、屋台で売っているベビーカステラを想像してください。合わせ鋳型では、隙間のあるベビーカステラ（右図）の形は絶対にできませんね。つまり、岩田 14 号墳の柄頭は合わせ鋳型で作られたものではない、ということになります。

また、先ほどの武寧王陵の例も、耳を表裏別々で作ってあって、隙間ができています。この武寧王陵の環頭は、「蠟型」というものを使って作られたと言われています。当時の実際の素材はよくわからないんですが、熱したら溶ける「蜜蠟」という素材を彫刻して、最初に原型を作ります。その上から粘土を隙間無く貼りつけて、それを熱すると、粘土は熱くなって硬化する一方で、中の蠟は熱に耐えきれずに溶けて全部流れ出ます。その蠟が溶け出た空洞に、今度は溶けた金属を流し込むと、原型と全く同じ形のものででき上がります。これが蠟型を用いた鋳造法、蠟を失う方法ということで「失蠟法」と呼ばれる作り方です。この方法であれば、先ほどのような隙間をもつ複雑な構造の刀を作ることができます。

つまり、隙間をもつ岩田 14 号墳はおそらく、武寧王陵のような失蠟法で作ったんだろう、ということになります。ところが、失蠟法では鋳型のバリのような筋は残らないはずなんです。結局振り出しに戻ってしまったわけです。ここからの製作工程の復元はとて専門的で、実際に復元製作をされている人たちに頼ることになります。そこで教えてもらったのが、またもや複雑な話なんです。最初の蠟型を「鋳造する」という、ひとまわりややこしい作り方です。

先ほどの蠟型では、蠟の塊を削って、いきなり原型の彫刻を作ったんですが、今度の作り方では先に木とか、加工しやすい金属とかで、「原型の原型」をまず作ります。そのまわりを、寒天のようなゼリー状のものを使って固めてやる。さらに、固まった寒天を切り開いて、中の「原型の原型」を取り出す。そして、その隙間にあらためて、溶けた蠟を流し込む。すると、この蠟型ができ上がる。あとはさっきと同じ手順で鋳造します。こうしてみるとすごく複雑な手順ですが、この方法ならば、寒天を二つに切り開いたところに、先ほどの合わせ鋳型のようなバリができる、ということになります。このような作り方



を推定しました。そして、果たしてこの推定が合っているのかどうか、製作実験をしたわけです。といってもこれは、私が直接行った実験というわけではなく、私が韓国に留学していた時に一緒に研究をしていた慶北大学の金跳咏さんが、日本にやってきて実施された実験です。まず銅を削って「原型の原型」を作ります。これを、適当な大きさの容器の中に吊して、寒天を入れて固めます。この寒天をパカッと真っ二つに割って、銅の原型を取り出します。そしてもう一回、寒天をカップに戻すわけですが、これが先ほどお話した合わせ鋳型になっているわけです。そして、その中に溶かした蠟を注入すると、蠟型ができあがってくる。これに粘土をぺたぺたくっつけ、さらに下から火を当てます。すると中の蠟が溶けまして、この時はやりやすいように銀を使ったということですが、銀を流し込むと最終的に製品ができあがりました。一度切った、寒天の合わせ目の部分に、バリがちゃんと出ているんです。製作実験で作った復元品に、実物と同じ痕跡が見つかったということで、先ほど想定した作り方は、合ってるんじゃないか、ということになります。ただ、同じようにできたからといって、絶対にその作り方で確定かという、はっきり言ってまだわかりません。ひょっとしたら別の方法があるかもしれない。

この推定の弱点をあえて言いますと、こんな回りくどい作り方をして何か得するのか、という点です。実は、この作り方のメリットは確実にひとつあります。それは、同じものを大量に作れる、という点です。武寧王陵のように、1個作った彫刻の蠟型をいきなり溶かすと、製品を1個作っちゃったらもう同じものは作れない。でもこの方法ならば、蠟原型を作るための元の原型が手元にあるので、同じ工程を経れば、また同じものがつくれるというのが、メリットなんです。ただですね、じゃあ全く同じ形の出土品が確認されてるかということ、残念ながら見つかってないんです。もし全く同じものが見つければ間違いないということになりそうなんです、これが少し論拠の弱いところなんです。しかし、環の側面に見える直線状の痕跡が何らかの製作技法を反映している可能性が極めて高いということはいえますので、今回は実験で復元した製作工程を議論の土台にして、次に話を進めていきたいと思います。考古学の研究者はついつい、ここまでで何となく満足してしまうんですが、本当はここから先が重要になってまいります。製作技術を検証して解明してみた、で終わるのでなく、やっぱりもう一步踏み込みたいわけです。もともとの研究の目的は何だったのか。「装飾付大刀の製作技術系譜を明らかにして、古墳時代の朝鮮半島諸国と倭の関係の実態と、それに伴う社会の成長過程を復元すること」です。では大刀の作り方がわかると、それがどういう話に繋がるのか、それを解説していきたいと思います。

武寧王陵出土品の製作法は、通常の失蠟法、これを「直接失蠟法」といいます。一方、日本で出土する単龍環頭大刀は、ちょっと複雑な工程を経る間接的な方法で、「間接失蠟法」といいます。何が重要かということ、百済と日本のものは作り方が違うんだ、ということです。文様意匠はすごく似ていますが、金を被せる方法だけでなく、そもそもの鋳造の工程がスタート時点で違う。製作工程が全く違うということがわかります。そもそも、間接失蠟法は日本オリジナルの方法なのか、それを調べてみましょう。探してみますと、朝鮮半島出土品の中に、間接失蠟法のものがありました。それが実は、百済でも新羅でもなく、大加耶の大刀なんです。陝川玉田M3号墳出土の大刀は、環の中の文様は全く違いますが、環の側面をみると直線状の痕跡が残っているのを確認できます。全く文様の雰囲気は違うのに、作り方は共通している、ということになります。大加耶は東西を新羅と百済に挟まれた地域です。他の小加耶、阿羅伽耶は自分たちでまとまった量の金工品を作る段階には至っていないんですが、大加耶だけは自分たちオリジナルの冠などを作っていて、相当な勢力を持っていた集団でした。ここで作っている刀も龍鳳文環頭大刀ですが、顔がよりデフォルメされているというか、あまり細かい部品を表現しないようなデザインになっている、百済の刀とは全く異なっていることがわかるかと思えます。ですが、どれを見ても、環の側面に線状の痕跡が認められるんです。つまり、日本で出土する単龍鳳環頭大刀は、デザインは百済だけど、作り方は大加耶だ、という

ことがこの研究によって言える、ということになります。

気になるのが、なぜ大加耶系の技術をもった人が、百済風の刀を作ったのか、という問題です。ここで重要なのが、日本列島で単龍鳳環頭大刀が出現する時期です。それはおおそ6世紀の後葉ぐらいだと考えられるのですが、『三国史記』によると、大加耶は562年に新羅に併合されて滅亡してしまっているんです。つまり、日本で単龍鳳環頭大刀が出土し始めるのが、大加耶の滅亡と前後するか、あるいはもう少し後ぐらいのタイミングになってきます。そうすると、ひょっとしたら、日本で出土する単龍鳳環頭大刀は、大加耶が滅亡した後に、大加耶から来た渡来工人たちが作ったんじゃないか、という解釈が成り立ってくるわ



けです。これまでは、日本の単龍鳳環頭大刀は、文様の類似性を根拠に、百済との関係の中で導入されたと考えられてきましたが、実際は、大加耶工人たちが製作に関わっていた、ということになります。この辺りは解釈になってきますが、大加耶が滅亡する時期を前後して、加耶の職人さんたちが日本にやってきたのではないかと、彼らは大加耶で、刀などを作っていた人達なんです、大加耶が滅亡したことによっていわば職を失っちゃったわけです。そういう溢れた職人さんたちが、自分たちの活躍の場を探していた。そこに技術者を欲するヤマト王権の需要が合致したんじゃないか。ヤマト王権の要請で、彼らは日本にやってきて百済風の刀を作り始めたんじゃないか。つまり、日本列島での単龍鳳環頭大刀製作が始まったきっかけは、大加耶の滅亡という朝鮮半島情勢の変化だったのではないかと、というのが、私のマニアックな研究のひとつの結論です。

これは実はとっても重要なことだと思います。この単龍鳳環頭大刀は日本ですごくたくさん出土しているんですね。これを百済との関わりで解釈すると、やっぱりこの時期は百済と交流が深かったんだという理解になってきます。しかし、これがもし百済と関係なく、大加耶からやって来た人たちが作ったものだとして解釈すると、単龍鳳環頭大刀は百済との関係性を論じるための根拠とはなくなってきますし、大部分は舶載品でなく日本でつくられたものだということになります。もちろん、あれだけ文様が似てますので、百済との関係が一切ないということはないんですが、少なくともメインでそれを作っていた人たちは大加耶系の工人たちだったといえます。

半島系文物のさらなる系譜検討

最後に、古墳時代には朝鮮半島系の文物がたくさん出土していますが、その系譜をより慎重に考えないといけないという提言をしまして、お話をまとめたと思います。

古墳時代後期の真ん中から後半にかけて、大体6世紀の半ばぐらいから、朝鮮半島からもたらされたと思われる品々が爆発的に増え、古墳時代全体を通じて一番多くなるタイミングがあります。この時期は「舶載品ラッシュ」と呼ばれています。この時期に入ってきた半島系文物とされるものの中には、その後、日本で定着しなかったものがあったり、日本の中でちゃんと定着して主流として作られるようになるものがあったりします。ここで重要なことは、どこに系譜を持つ資料が主流となったのか、あるいはならなかったのか、というのを、詳しく探っていくことです。例えば、三累環頭大刀（写真下右）は、先ほどお話ししたように新羅で一般的な刀の意匠です。でも「武寧王陵の刀と似ているから百済」というような解釈が今回の検討で崩れた、ということが重要で、「三累環頭大刀は新羅から手に入れた」というような定説的解釈は一から見直す必要が生じています。大阪の海北塚古墳で出土した馬具は、もともとはベルトに繋ぐ部分の構造から新羅と関係があるのではないかとと言われていましたが、これも最近の研究で加耶、特に大加耶と関係があるのではないかと、積極的に指摘され始めていて、研究は次の段階に進んできています。「三累環頭大刀＝新羅」、という解釈も、それが新羅から直接やってきたのか、あるいは、日本の中でそれが作られたのか、それによって、歴史の解釈が切り替わってしまうというわけです。古墳時代の中でも、装飾付大刀がいっぱい出てくる舶載品ラッシュの時期というのは、今後の研究の深まりによってますます歴史像が変化し得る分野ということになります。



詳しい系譜を考えることがいかに重要かというのを、今回、結論として述べて話を終えたいと思います。どうしても先入観として、キンキラキンの物が出てきますと、これは朝鮮半島から来てるんだというようなお話が出てまいります。これまで何の疑いもなく朝鮮半島からやってきたものだとして認識されてきた遺物・遺構についても、ここまでの検討でもわかりますとおり、その系譜理解はひょっとしたら今後動くかもしれません。先入観的に「半島系

文物」とされてきた資料を、もう少ししっかりと、深く、検討しないといけない。それをやるには、先ほどのような、こんな線状の痕跡がついてるとかついてないとかってというような、細かい検討をしていくことが時に必要となります。そういうマニアックな細かい検討が、この時代の歴史の見方を変えていくような大きな話に繋がっていくんだ、というお話でした。

今回のお話は、これで終わりにさせていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

【司会：山田】金先生、最新のご研究に基づく大変貴重なご講演をいただき、ありがとうございました。皆様どうぞ拍手でお送りください。



パネルディスカッション

若狭 徹 (明治大学文学部准教授)
金 宇大 (滋賀県立大学人間文化学部准教授)
青笹 基史 (埼玉県立さきたま史跡の博物館学芸員)
角正 淳子 (三重県文化振興課主査)
黒石 哲夫 (和歌山県文化遺産課企画員)
松尾 充晶 (島根県古代文化センター専門研究員)

【司会：山田】これより、古代歴史文化講演会、パネルディスカッションを行います。まず、出演者の皆さんをご紹介します。皆様から見て、右側の席から、明治大学文学部准教授の若狭徹先生です。続いて、先ほど基調講演をしていただきました金宇大先生です。次に、埼玉県立さきたま史跡の博物館の青笹基史さんです。次に、三重県文化振興課の角正淳子さんです。次に、和歌山県文化遺産課の黒石哲夫さんです。最後に、島根県古代文化センターの松尾充晶さんです。ここからの進行は松尾さんにお任せします。それでは松尾さん、よろしくお願いいたします。

【松尾】金さんの基調講演、めっちゃめっちゃ面白かった。そしてめっちゃめっちゃオタッキーです。髪の毛一本ないぐらいのミミズ腫れの観察から、あれほどのことがわかるわけです。紹介された武寧王陵の次の百済王は聖明王、この時に百済から日本へ仏教が伝わりますね。このように、日本と百済はこの時期、大変たい交流のパイプがある。まして武寧王陵と同じデザインの単龍環頭大刀が出土する訳ですから、これはもう間違いなく百済で作られたものが輸入されたか、もしくは百済系工人が来て作っているんだろう、それが定説でしたし私もそう理解していたんです。ところがそうではなくて、どうやら新羅の圧力に飲み込まれて562年に滅亡した大加耶から、技術者が来て国内で百済風の大刀を作ってるんじゃないか。こんな話はですね、日本書紀、三国史記のどこを読んでも出てこない。すごいストーリーなんですね。私も40歳過ぎてから、原因は不明なんですけど、近くの細かいものが見つらなくなってきて(笑)、このような緻密な研究はできないんですが、髪の毛一本に満たないような筋状の痕跡から、これほどスケールの大きいことがわかる、ということに皆さんも驚かれたんじゃないでしょうか。ここからは、パネルディスカッション「刀剣が語る古代国家誕生」と題しまして、古墳時代、特に5世紀、6世紀の時代を、日本各地の視点を加えて考えていきたいと思います。

ただちょっとその前にですね、この講演会を主催しています古代歴史文化協議会という謎の会の紹介を少しだけさせてください。開会のご挨拶にもありましたが、14の県が力を合わせて共同で調査研究を行っています。平成26年11月に設立をして、それ以来、古墳時代の玉類について共同研究を行って参りました。毎年1回ずつ今日のような講演会を開いて、3回まで続けてきたということになります。また、平成30年度はそうした成果を発表する年と位置付けまして、江戸東京博物館・九州国立博物館で展覧会を開いて参りました。2ヶ所の会場合わせて11万人ものお客様にご来場いただいたわけです。また、後に残る成果物として、研究成果をわかりやすくまとめた書物を制作しました。今日は出版社の方がロビーで販売していらっしゃいます。ご希望の方ありましたらぜひお帰りの際にでも見ていただければと思います。さらに、





当協会はホームページでも様々な情報発信をしています。主に第1期の玉に関わる研究成果を公開しておりまして、例えば14県からどのような玉が出土しているかという集成データとか、今日のような講演会の資料も載せております。

大変前置きが長くなってしまいました。今回は第4回と言いながら、初めて刀剣をテーマにした講演会です。ディスカッションのパネラーとして、基調講演をいただいた金宇大さん、そして会場である明治大学の若狭徹先生にもご登壇いただきました。若狭さんは、昭和37年、1962年の長野県生まれ群馬県育ちで、明治大学のご卒業、史学博士。古墳時代の考古学がご専門で、東国の古墳文化研究の第一人者でいらっしゃいます。優れた考古学研究の業績を表彰する藤森栄一賞や、浜田青陵賞を受賞していらっしゃいますし、また一般の方を対象にした優れた書籍を表彰する古代歴史文化賞の優秀作品賞も受賞していらっしゃいます。今は大学の先生ですが、長らく文化財行政にも関わっていらっしゃって、群馬県高崎市の文化財保護課長から、2017年の4月に現職にお就きになっています。今日は、地元群馬のご代表ということでよろしいでしょうか、広く東国の古墳文化の視点からお話をいただきます。また、私を含めた4名は、各地域をフィールドとする行政に身を置いた研究者でありまして、それぞれの地元代表として、関東や近畿、また山陰といった各地域の観点からお話をしたいと思っています。

今日、ディスカッションで扱いたい論点は大きく二つ、と考えています。一つは、古墳時代の社会構造、首長の権力などがどのようなもので、各地域にはどんな特色があるのか、という点。さらに、刀剣から、古代国家ができていく過程をどのように読み取れるか、という点。この2点を今日の話題にしたいと思います。お手元の資料にも年表をつけていますが、この中で今日主に扱うのは、5世紀後半から6世紀、古墳時代の中期後半から後期という時代です。これがどのような時代だったのか、4県の担当者の中では最年長の黒石さんから、簡単にご説明いただきたいと思います。

【黒石】 和歌山県の黒石でございます、よろしくお願いたします。まず古墳ですけれども、これは弥生時代の墳丘墓とか周溝墓が成長してですね、古墳時代になって古墳になったわけでございます。例えば中国とか朝鮮半島とかから入ってきた、そういったお墓じゃないわけでして、まず大和地域の纏向地域で前方後円墳になって、その纏向の地に箸墓古墳という全長280mという非常に大きな整った前方後円墳が出現します。基本的にそこから古墳時代が始まると、我々はそういうふうと考えております。古墳時代の前期から中期、朝鮮半島から製鉄の技術などが入ってきまして、新たな農工具や武器ですね、大規模な用水路水田地帯を開発してですね、農業生産が上がった。そうしたことによって大規模な前方後円墳を築くようになってくるわけです。人口が300万人ぐらいいて平均寿命40年、8世代300年間とすると、古墳時代に生きた人が2400万人いて、作られた古墳が20万基ぐらいいいますと、大体140～150人ぐらいいに1個の古墳を作っていた(?)ということになる。そう考えたら古墳というものを身近に考えられると思います。そういった形で前方後円墳が全国に広がっていくんですけども、ヤマトにあった王権が5世紀前半には河内地域、大阪湾の方に進出してですね、仁徳天皇陵とか応神天皇陵といった、巨大な古墳ができていったわけでございます。

古墳時代の中期にはですね、宋書倭国伝によると倭の五王が中国の宋に遣いを送って、官位を求めたことが書かれています。それから中国の吉林省にあります高句麗の好太王碑に1,800文字が書かれています。その中に倭の軍勢が西暦391年から412年にかけて朝鮮半島に4回攻め込んで行ったんですけども、ことごとく高句麗の広開土王に撃破されたと、そういったことが書かれています。早くも4世

紀の終わりぐらいには、朝鮮半島にも兵士を派遣していた。倭国の国力が結構あったな、そういったことがわかります。それから中国の宋に遣使した讚・珍・濟・興・武という五人の大王がいたんですが、これは大体、仁徳天皇から雄略天皇の時代です。一応ですね、5世紀の初めぐらいから5世紀の終わりぐらいの日本の、国王がですね、中国に使節を送ったということでございます。大体それが中期の頃の時代でございます。それから古墳時代の後期になっていきますと、5世紀後半の雄略天皇は兄弟2人とか、或いは親類とか、いろいろ身内で権力争いをして滅ぼして、王族がだんだん減っていくわけでございますね。それでついに武烈天皇の時代になりますと大王の家が一旦途絶えまして、そこで王権がちょっと空白になるわけです。

その後、継体天皇が即位するわけでございます。越前、今の福井県あたりを基盤としていたんですけども、そういった継体天皇が26代の天皇になります。507年に即位したんですけども、なかなか大和の中心地に入れず、その間に527年には筑紫の磐井の反乱が起こっております。もう少し時代が新しくなると、継体がなくなった後に安閑・宣化・欽明が即位するんですけども、特に欽明は権力を強めまして、物部氏とか蘇我氏の協力を得て、全国に屯倉を設置したりして大王家は復興を果たします。蘇我氏が有力になっていきまして、587年、仏教の取り扱いについて戦争激突を起こしまして、蘇我氏が物部氏を滅ぼします。それから蘇我氏は592年には崇峻天皇まで滅ぼしまして、非常に専制的な政治を行っております。この頃、古墳時代の内部施設も竪穴式石室から横穴式石室に変わって、古墳の数も非常に多くなって参ります。以上が古墳時代の流れですけども。6世紀後半になりますと仏教が伝来しまして、やがて前方後円墳も築かれなくなってですね、逆に仏教寺院が作られ始めると。こうして古墳時代が終わっていく、大体そういったような流れでございます。以上でございます。

【松尾】 いろんな大王・天皇の名前が出て参りましたね。倭の五王から雄略大王の段階、そして6世紀前葉の継体大王、さらには6世紀中葉の欽明天皇以降という、段階があるということでした。今日はこの時期のなかを、話が行ったり来たりすると思います。それでは各地を代表して来ていただいているパネラーの皆様には、それぞれの地域の古墳時代の動向、具体的にどのような勢力が伸びて、地域内の秩序っていうのはどうなのかという話をお聞きしたいと思います。まずは東国につきまして、若狭さんからお願いします。

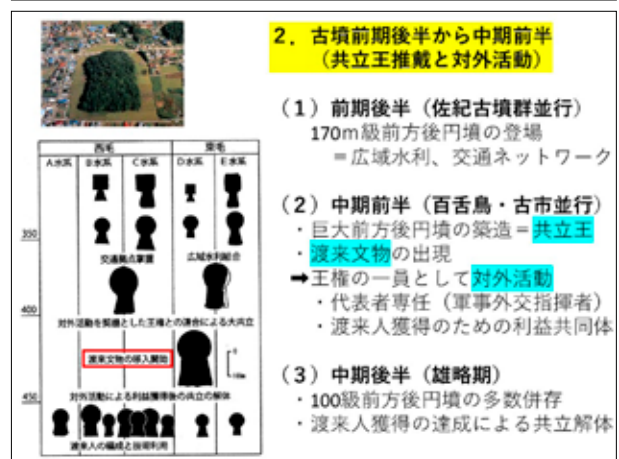
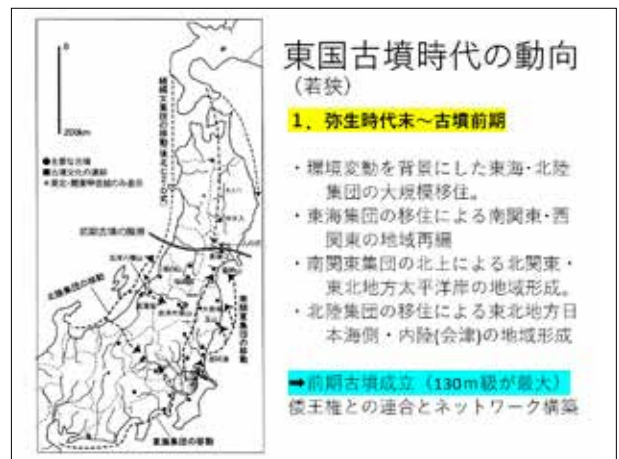
【若狭】 若狭でございます。よろしく申し上げます。私は、今日のディスカッションの中心になる、大刀が配布される6世紀後半に至るまでの、東国の古墳文化がどのように形成されたか、ということを駆け足でご紹介したいと思います。

弥生時代後半は環境変動の時代と言われております。最近の研究でその様相が分かって参りまして、昨今、多雨化が続いてるんですけども、そういう時代がやはり弥生後期に起こっていたと言われております。その頃、環境変動を受けて、北陸集団や東海集団が東日本に大量に移住するということが起こります。それで関東が外来集団によって変質していくんですけども、この関東の変動を受けてさらに玉突きで、南関東集団が東北に北上しまして東北の古墳文化を作り上げる、こんな状況が分かってきています。

集団移住を受けて湿地開発が進みまして、各地域に100[㍉]級の前方後円墳、前方後方墳が登場するというのが、前期前半のお話です。この頃になりますと私のフィールドとしております群馬県では、130[㍉]ぐらいの前期古墳が成立しまして、水系を治めるような首長が登場したと考えられます。

それが前期後半になりますと、170[㍉]級の前方後円墳が登場してきてまして、低湿地開発を踏まえた広域水利網や、海上交通を中心とする交通ネットワークができ上がりまして、大きい古墳、大首長が登場するというのが、前期後半です。

そして中期前半ですね、百舌・古市古墳群の時代



3-1. 中期後半の地域経営 (渡来人の編成)

(1) 水利刷新
 ・渡来系治水技術による農業水利の刷新。小区画水田＝耕地拡大
 ・高燥地の畑作地域の拡大

(2) 手工業
 ・窯業（埴輪・須恵器）
 ・鉄器生産・紡織等

(3) 馬生産
 ・山体部を中心とした馬生産
 ・馬の貢納ルートの開発

3-2. 中期後半 (地域首長連合の推進)

・地域経営者の併存 ・渡来人の編成と大開発
 ・群集墳の出現 ・大幅な経済成長 ・上番制

4. 後期前半 (継体朝)

(1) 政治変動と地方勢力＝地方に偏在する大型前方後円墳
 ・今城塚古墳：大阪（継体）
 ・断夫山古墳：愛知（尾張連草香）
 ・岩戸山古墳：福岡（筑紫君磐井）磐井の乱
 ・七胸山古墳：群馬（上毛野君小胸）武蔵国造の争い
 ・埼玉二子山古墳：埼玉（笠原使主）武蔵国造の争い

(2) 継体後の政治変革
 ・屯倉・国造制・氏族・部民制

図20 6世紀前半の主要大型前方後円墳（130m以上）

5-1. 後期後半の地域構造

(1) 大勢力の解体と屯倉設置
 ・七胸山古墳の後に二つの屯倉
 ・二屯倉に4系列の中型前方後円墳＝屯倉経営者層
 ・農業再興と手工業振興（山部）
 ・渡来技術・部民＝屯倉開発

(2) 前方後円墳被葬者の性格
 ・大型前方後円墳＝国造（後の評督〔郡領〕層）
 ・中型前方後円墳＝屯倉・名代の管理者層

図21 上毛野内郡における國造の屯倉の組織モデル
 図22 國造勢力（上毛野内郡）と屯倉勢力との組織モデル

になりますと、より一層大きい前方後円墳、群馬県の太田天神山古墳。210mを超える巨大前方後円墳ですが、こういったものが登場してきます。ただし専制的な王の登場ではなくて、地域首長に担ぎ上げられた共立王の登場を示していると考えられます。関東では他に茨城県の舟塚山古墳や、千葉県の内裏塚古墳などで、そういった共立王の登場を見ることができます。

それまでの経済活動を越えた形で大きな首長が共立される背景は何かと考えますと、この頃から東日本にも渡来文物が出現して参りますので、王権の一員として東日本の豪族が初めて対外活動を行うにあたって、代表者を選任する。これは軍事代表者・軍事指揮者でもあると思いますが、そういう代表者を選任するということが、共立王が登場してくると思います。その背景には、東日本の豪族も渡来人を獲得したい、渡来文物を我が物にしたいという利益行動、利益共同体のまとまりが、共立を担ぐ原動力になってるとみられます。

しかし、渡来文物を我が物にしますと、この利益共同体は解体いたしまして、もう二度と巨大前方後円墳は作られない。5世紀中頃になると100m級の前方後円墳が林立しながら、地域開発をしていく。渡来人を獲得して、それを元にした地域開発が進んでいくというような形になって参ります。これが渡来人を導入した地域首長の地域経営の実像なんですけれども、一つは水利刷新ですね、渡来系の治水技術を導入して、農業経営を刷新する。小区画水田などを導入してともかく耕地改革を成し遂げていくというのが、第1の地域経営手法です。もう一つは、渡来人を配下において手工業生産を高めていく、窯業、鉄器生産、紡織、さらに重要なのが馬生産です。それまで日本に馬はいなかったわけですが、東国の広い大地において生産していくことで生産力を高めていくわけですね。その首長の配下には、これは群馬県の事例ですけども、積石塚だとか、外来系の遺物が見られまして、渡来集団がその下に編成されていることが明らかであります。地域社会の構造は、100m級前方後円墳が林立して、緩やかな上位首長の連合が組まれています。さらにその下に第2ランクの首長、それから群集墳が登場して、下部構造を支えていくような、階層が生まれます。さらに、その首長間を超えて渡来系の積石塚がたくさん出て参りますので、各首長が渡来人を配下に編成をして、産業振興に資しているという構造がわかります。

この頃は雄略朝の段階になりますので、埼玉稻荷山古墳の鉄剣に見られますように上番制、それから人制といった、初期的な官僚制度が登場してくる時代になります。しかし雄略朝はそのまま専制的な律令国家に進むことはなく、継体朝の変動を迎えるわけです。百舌鳥古墳群、古市古墳群がなくなりまして、そこから当時の政治変動が推定されるわけですが、後期前半の倭国の大型前方後円墳トップファイブを挙げるとこうなります(図)。

トップは大阪府の今城塚古墳、これが継体大王の墓と考えられております。ナンバー2は愛知県断夫山古墳、ナンバー3は群馬県七興山古墳、ここまでのナンバー3なんですね。ナンバー4は福岡県岩戸山古墳、これは後に反乱を起こす磐井の墓。それからナンバー5が埼玉二子山古墳ですね。このように6世紀前半の主要前方後円墳は、地方にあるというのが特徴で、これがやはり継体を支えるような、豪族たちと考えることができます。

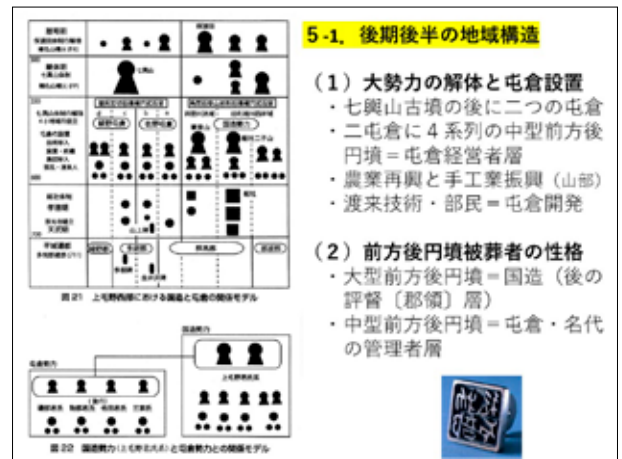
この継体期の後半から、地方豪族の反乱が起りまして、継体の政治の矛盾が噴き出してくるわけですが、そうした地方豪族の反乱などを解消していく政治制度が登場してきます。一つは屯倉の設置ですね、それから国造制の創始によって地方豪族を官僚に組み込んでいく。それから氏族、部民制。こういった制度を駆使しながら欽明朝の改革が進んで参ります。

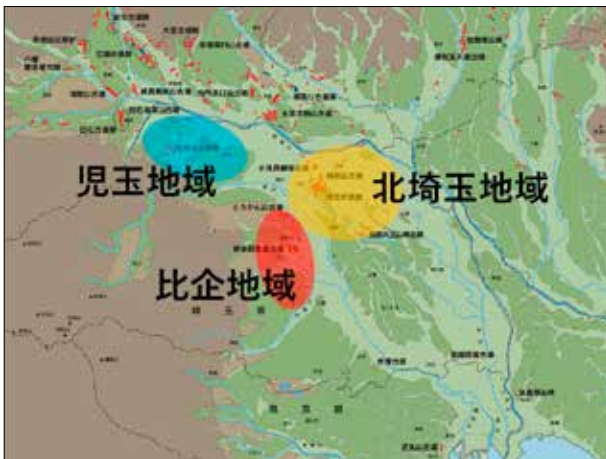
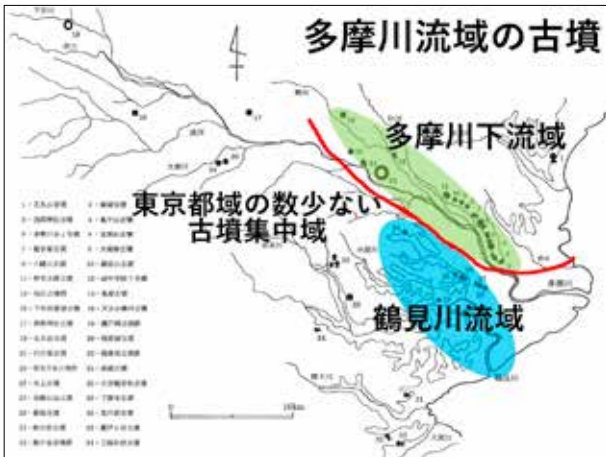
(図)はその頃の群馬地域の動向ですが、七興山古墳という150^号級の、おそらく継体を支えたであろう大豪族がいたわけですが、この豪族が解体されていきます。武蔵国造の争いという当時の事件が日本書紀に書かれていますが、そういった事件を通して、上毛野の有力勢力が解体されている。七興山古墳勢力が解体された後には中型前方後円墳が林立してきます。そしてそういうところに、緑野屯倉、佐野屯倉という屯倉が設置されてくる。60^号級前方後円墳の被葬者は屯倉の経営者と理解されまして、この群馬県地域で100^号級前方後円墳を打ち立てるのは国造の勢力というふうに考えられます。このような形で地域勢力が解体されて、屯倉が東国にも設置されてくるというような状況がわかって参ります。

そしてこの頃、西日本では前方後円墳が非常に衰退していき、円墳・方墳に変わっていきます。大王と有力氏族以外の墓は、円墳か方墳になってくるわけで、官僚化が進んでいくということがわかりますけれども、一方関東だけは6世紀後半になっても、前方後円墳が大量に造られるという現象が起こって参りまして、これは特殊であります。東国では前方後円墳システムが温存され、古い権威が生きている。その背景には当時の王家や中央氏族と、東国氏族が個別に結びついて、屯倉や名代の経営をすることで連携していることがあって、その中で古い権威である前方後円墳を温存させている。そして経済的・軍事的にヤマトが東国に依存しているということが推定されるわけですね。またこの時期に東国豪族は軍事外交に参画しているということもわかっております。まさにこの時期に、装飾付大刀などが配布されていると、こういう時代背景でございます。

【松尾】 まさに先ほど黒石さんがお話しになったような、5世紀後半・6世紀前半・6世紀後半という大きく3段階ぐらいの画期があるというあり方で、東国モデルというべき地域変動がとてもよくわかるというお話でしたが、同じ関東として、群馬県周辺のモデルが一般的に当てはまるのかどうかという点について、埼玉県の青笹さんにお聞きしたいんですが、いかがでしょうか。

【青笹】 はい、青笹です。関東地方における主な古墳をプロットしてみますと。群馬県に集中することと、千葉県の内房付近にまとまっていることがわかります。私は今回、神奈川県と埼玉県と東京都、3都県のお話をするんですけども、この3都県の中ではさきたま古墳群に集中していることがわかりま



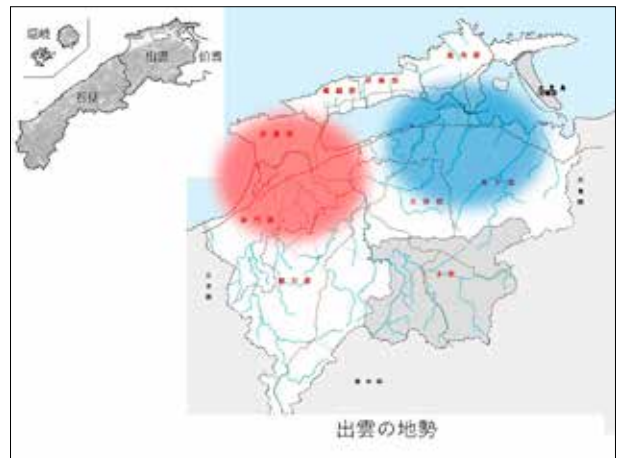


す。この地域での全体的な古墳時代の話をしていきたいと思います。後期になると群馬県では林立するようなんですけれども埼玉県ではこの北埼玉地域、さきたま古墳群の辺りに集中するという状況がありますが、逆に言うとこの場所以外では大きい前方後円墳が築かれていない、というのがこの地域の特徴となります。神奈川県と東京都の境目に当たる多摩川の流域、この辺りには、古墳と同時に横穴墓も同時に展開していることが特徴的な地域で、この横穴を作るような人たちと、高塚古墳を作る人たちというのが同時期に同地域で、違うお吊いの習慣が併存しているという状況がございます。神奈川県の前方後円墳の分布では、旧武蔵国の領域にあたる川崎市から横浜市の間あたりと、三浦半島、相模川、これらの地域にそれぞれ分布が分かれています。これを古墳時代後期の様相で見た場合、西から師長国造の領域、相模川沿いに相武国造の領域があって、三浦半島には鎌倉別の領域があるというのがそれぞれ土器の様相から指摘されているところがございます。東京都域は、東京タワーのすぐそばにある芝丸山古墳を除くと、ほとんど大田区と世田谷区の辺りに集中しているということが読み取れます。神奈川県の鶴見川流域と、東京都多摩川流域は数少ない古墳の集中域と言うことができます。続いて埼玉県の話をいたしますと、埼玉県域は三つの地域、比企地域、北埼玉地域、児玉地域というふうに分けることができます。この地域の渡来系要素という点では、集落からはちょっと見えづらい地域として、副葬品に焦点を絞って話をしていきたいと思います。埼玉稲荷山古墳はTK23・47と言われる時期の古墳ですが、渡来系の馬具や農具、装身具がいろいろ副葬されています。渡来系要素がすごい強い古墳であることをご理解いただければと思います。その後が続く、同じさきたま古墳群の将軍山古墳です。こちらも渡来系要素がいろいろなものがあるんですけれども、この馬具が目立ちます。武器や武具類いろんなものに渡来系要素があるんですけれども、写真は実際にうちの昔の展示で、実際に埼玉将軍山古墳からの出土品を復元したものです。97年の出来事ですので最近のことなんですけれども、当時日本にいた在来馬をお借りして、出土した馬具を復元して装着させて、さきたま古墳群内を闊歩させようという当時の写真です。この写真を見ても、複数の地域、加耶系、新羅系の馬具が一つの馬に装着されている状況が見取れます。その背景は何なんだろうということ考えたときに、先ほどから話題になっている大加耶の併合といった朝鮮半島南部地域の社会構造の変化が、埼玉稲荷山と将軍山で異なる文物が入っているという状況を示しているんだろうということがございます。

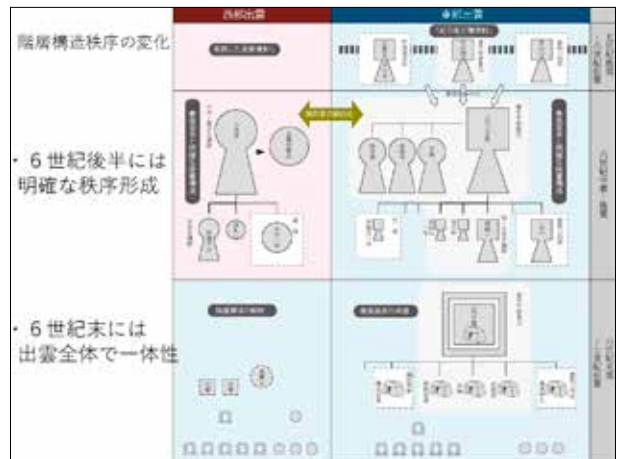
武蔵国造の乱について、さきたま古墳群と歴史上の出来事を関連づけて少し説明をいたします。さきたま古墳群は、これまでの研究で武蔵国造の乱との関わりについ

て言及されています。武蔵国造の乱というのは、日本書紀の安閑紀に記されているもので、武蔵国造という国造の職をめぐって笠原の一族が継承戦をするわけなんですけれども、それぞれに対してですね、近畿の大王であったり、地方の豪族である上毛野君がてこ入れをして代理戦争になるというのがこの乱の概要です。結局、武蔵国造の乱の勝者になった人っていうのは近畿中央政権、王権のてこ入れを受けた方でございます。笠原直使主という人物なんですけど、この使主さんは勝ったことで喜んで4ヶ所の屯倉をヤマト朝廷に献上するという事になって、負けてしまった方の上毛野君の方も、負けてすいませんということで翌年に屯倉を献上する羽目になるということで、誰が得をしたのか一目瞭然な事件、ということでございます。さきたま古墳群というのは、武蔵国造の乱で、実際どの古墳がその人に当たるのかということとで6世紀前半の古墳を探していくと、さきたまでは、二子山古墳が6世紀前半に位置付けられています。6世紀前半の古墳で130mを超える古墳というのは限られておりまして、先ほど若狭先生の説明にあった通りでございます。ですので二子山古墳というのが、武蔵国造の乱で勝った笠原直使主の墓なんじゃないのかということをお若狭先生が考えていらっしゃるということでございます。私からは以上です。

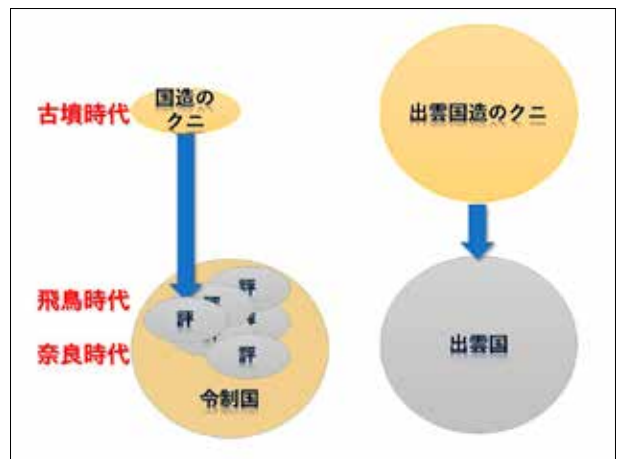
【松尾】 青笹さんは埼玉の方なんですよね、なぜ、東京都や神奈川県のことまで話さなくていけないか、皆さん不思議に思われたと思いますが、それは私が無理にお願いしたからでして。青笹さんもきっとなぜだ、と思ってると思うんですけど。埼玉だけでなく武蔵全体、或いは相模のあたりを一体的に見てみると、やはりさきたま古墳群的特質的な集約性というのがよくわかるというふうに思います。それで、先ほど話題になった武蔵国造の乱については、若狭さんも言及していらっしゃると思いますので、ちょっと触れただけませんか。



【若狭】 武蔵国造の乱については諸説あって、乱そのものが無かったんじゃないかっていう学者もいるわけですが、地域の古墳の動向を踏まえると今のように鮮明になってくるわけですね。武蔵国造の乱直前の527年、継体の晩年には磐井の乱がありまして、北部九州の実力者が力を削がれる、そして屯倉を献上するという流れになってますが、それに続いて起こった事件こそがこの武蔵国造の争いです。ここで、やはり継体を擁立したような上毛野の実力者も力を失っていくということで、東西の地方勢力を解体した画期的な事件だったろうと、そのように考えられるわけですね。



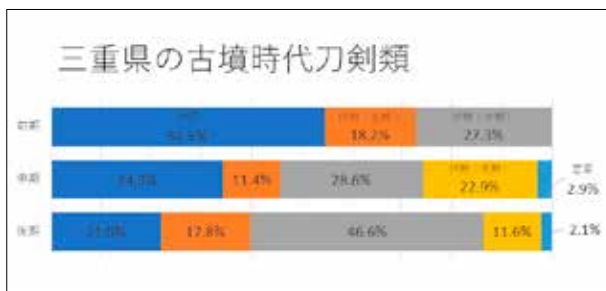
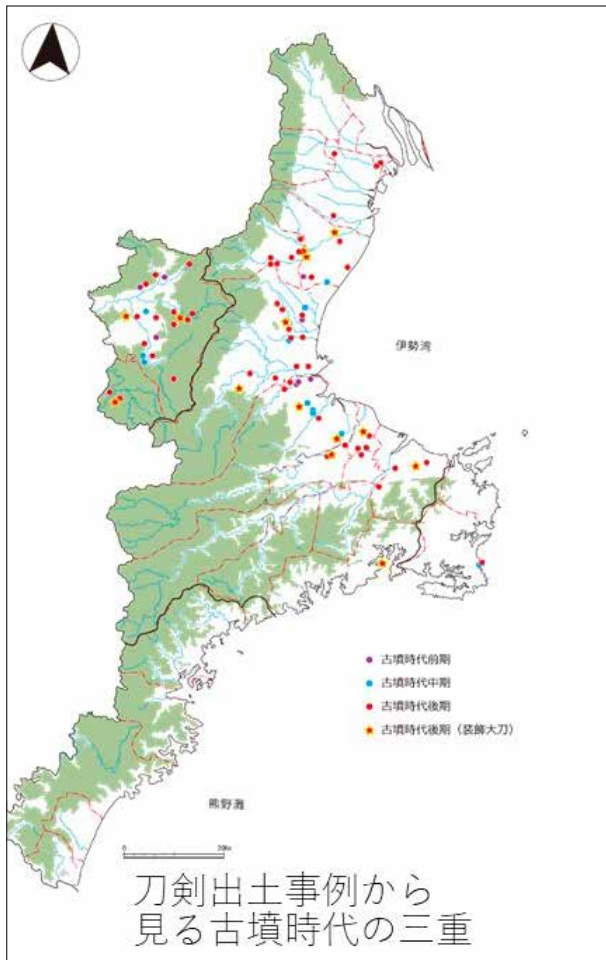
【松尾】 ここまで東国のお話をさせていただきましたのでちょっと目を転じて、西日本の状況を見て参りたいと思います。私は島根県から参りましたが、島根県は出雲・石見・隠岐という3地域からなっています。その中で一番遺跡が集中していて、そして研究も進んでいる出雲の話をお今日はしようと思います。出雲地域といいますのは大きくは松江市あたりの東部と、出雲大社がある今の出雲市あたりの西部からなっています。そのエリアの古墳を見てみると、仁徳陵古墳など、全国的に墳丘が最大化する前方後円墳の時代に出雲では前方後円墳が全然ないんですね。不思議なことです。出雲には大きな勢力があったという説があるのに、この時期のトップの古墳はすべて方墳なんです。そしてその後の6世紀に入りますと前方後方墳という、鍵穴の部分の四角い古



墳が主流となって参ります。この前方後方墳は横並びに、各小地域でピラミッド型の古墳秩序を作っていく。これを我々地元の研究者は前方後方墳体制なんて呼んでいるんですが、そのように前方後方墳をトップにする秩序、ルールっていうのがはっきり見えるようになります。そして面白いのは、それが6世紀の後半になりますと、出雲の東部と西部が拮抗するような大きな2勢力となっていくという状況です。最終的に、出雲東部が出雲全体を一つにまとめたと考えられていまして、7世紀前半に、それを治めていたのは出雲国造、現在の出雲大社の宮司家に繋がる一族であります。この出雲最大有力氏族である出雲国造のクニ、というのは、言ってみればほぼ律令期の出雲国全域に当たるぐらいの非常に広域な地域です。これを関東と比べてみますと、例えば茨城県、常陸国を見てみますが、『先代旧事本紀』によれば全国で140ぐらいの国造がいたということがわかっていまして、茨城県域の中になんと7人の国造がいたことがわかっています。それが飛鳥時代を経てどうなるかというと、国造の領域は、評、後の郡と呼ばれる単位になってきます。複数の国造のクニの延長である評がまとまって、常陸国になっている。これが関東の国造の例です。それと比べて、出雲の国造のクニというのは、評ではなくそのまま出雲国という非常に大きな領域に相当します。大国造、とも言います。出雲の特徴はと言われれば、こういった古墳時代の地域の秩序が比較的早く、そして強固に、そして広域にでき上がった地域だというふうにいえると思います。このことが、おそらく後で話題にする刀のあり方にも関わっていくのではないかと、というふうに私は考えています。

これが出雲大社がある出雲の特徴だとすると、伊勢神宮のある三重県はどういう状況でしょうか。

【角正】 三重県の角正です。よろしくお願ひいたします。先ほど、伊勢神宮のある三重県と言っていました、



伊勢神宮とか鈴鹿サーキットってご存知かと思うんですけども、三重県の位置がどこか、ということ意外に知られていないんですね。三重県は自虐的にですね、「実は全部それ三重なんです」というキャンペーンを数年来やっております、今日は三重県の位置を覚えて帰っていただければそれで十分かなと思っております。三重県は地理的には西に奈良県、滋賀県と接しています。南の方は和歌山県に接しております。東の方はですね、伊勢湾と熊野灘、海に接しております、東と西の文化が結節するような場所になっております。古墳時代はどうなっていたかといいますと、大きく律令期の四つの国に地勢が分かれております。畿内地域、奈良県に接しているのが、伊賀という地域です。そして三重県の大部分を占めていますのが、伊勢という地域です。それから海岸部、一番東が志摩という地域です。南の方は紀伊で、おそらく和歌山県と一体的な地域かと思えます。そこで、三重県に古墳がどんなふう分布しているのかといいますと、畿内に接している伊賀地域にやはり最初に古墳文化が入って参ります。県内最古は伊賀市にあります東山古墳という古墳になります。そのあと少し下って、中期にかかるかかからないかぐらいの時期に、石山古墳という大きな前方後円墳が築かれます。120 ぐらいの大きな古墳でして、戦後すぐに京都大学によって発掘をされたんですけども、こちらからは大量の遺物が出て参りまして、県内でも最多の副葬品が出土しています。一方、伊勢の方に目を転じますと、やはりちょっと遅れて古墳が築かれるようになって参ります。伊勢で一番有名な古墳は、松阪牛で知られる松阪市にある宝塚1号墳という古墳なんですけれども、重要文化財に指定されています舟形埴輪が出土した、それで一躍有名になりました。

その後ですね、ずっと下って後期には井田川茶臼山古墳とか、7世紀の前半になるんですけども坂本1号墳が

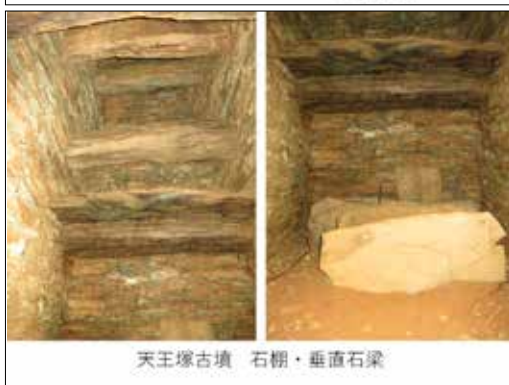
出て参ります。

志摩地域っていうのは、なかなか古墳が築かれないんですけども、中期中葉ぐらいに、志島古墳群のひとつ、おじよか古墳というのが突然築かれます。こういった中心になるような古墳が出て参りまして、地域全体としてどんなことがいえるかと思ひますと、伊賀地域というのはやはり奈良、滋賀と接しておりますので畿内にとっては交通の要衝に位置付けられるかなというふうに考えております。三重県からしてみますと、古墳文化がやはり一番最初に入ってくる地域ですね。古墳時代全体を通じまして築かれた古墳の数も多いですし、副葬品の出土内容でも非常に豊富な地域といえるかと思ひます。一方で、伊勢は範囲も広いですが、伊賀も志摩も実はあまり平野がないところでして、伊勢平野っていうのが非常に広い肥沃な平野になっています。若狭先生のお話でも農耕生産力が非常に発展してくる時代だというお話があったと思うんですけども、伊勢平野は豊かな農産が期待できる、非常にいい地勢の地域であったかと思ひます。ただ、余りにも広いのでやはり、分布が偏っております、時代はちょっと下りますが北部に伊勢国府ができます。南部には皆さんご存知の伊勢神宮がありますので、北と南でやはりだんだん古墳の様相が変わってきているといえるかと思ひます。古墳のあり方を見てみますと、最初に伊賀から入ってきたのが伊勢でも中勢の方に入りまして、そこから南の方へとだんだん分布が広がっていくというのが言えるかと思ひます。志摩というのは非常に特異な、三重県内でも特別な地域なのかなというふうに思っております。実際ですね、出土刀剣の集成状況から見ていきますと、伊賀と、伊勢の真ん中ぐらいに、刀剣が出土します。中期になってくるとそれがだんだん増えて参ります。後期になると全域に広がってくると、そんな感じになってきています。

先ほど申し上げました志島古墳群なんですけど、その11号墳というのがおじよか古墳です。本当に志摩半島先端部の、丘陵の上に作られた古墳です。石室を見ていただきますと、畿内の古墳とは違っておりまして、平石のような、平べったい石を積み上げた形の石室を持っている古墳です。これは九州北部の様相と非常に似ているということが言われておりまして、刀剣類のほかには短甲であったり、斧であったり、土器類、それから玉類が出土している。非常に豊富な副葬品が出土している古墳なんです。石室は九州系なんですけども副葬品は渡来系のものがたくさん出てきておりまして、三重県の中では非常に海路を通じた古墳ではないかと考えています。こういった様相は、たぶんお隣の和歌山県でもあると思ひますので、そのあたり黒石さんからぜひご紹介いただければと思ひます。

【黒石】 和歌山県は近畿のおまけとか言われておりますけれども、やっぱりパンダの数は全国1、梅干生産量もずっと全国1位を続けておりまして、国宝の数も実は全国第6位、重要文化財の数も全国第7位ということで、文化的にもそこそこ頑張ってる県ではございます。地勢的には、都のあった奈良県と紀の川で繋がっておったわけではございます。岩橋千塚古墳群は日本一の群集墳で、約900基の古墳からなっております。国の特別史跡になっております。それからですね大阪府の岬町の方へいきますと、西陵古墳とか宇度墓古墳とかですね、全





長が200㎝近い巨大な前方後円墳がありますけれども、実はこれは紀氏のお墓ではないか、というふうに言われております。鳴滝遺跡の大倉庫群、7棟の大型の倉庫群が昭和57年に発見されておりまして、当時、大変センセーショナルな話題を集めました。ヤマト朝廷の朝鮮半島出兵の時のですね、武器を入れていたのではないかなど、そういった説もささやかれておりまして、そこから初期須恵器とかですね、大型の貯蔵の土器も出ております。和歌山市の海岸部の西庄遺跡の石敷きの製塩炉ですね。上に石敷きの製塩炉がありまして、上と下からも石敷きの製塩炉が出ておりまして、五世紀代に何回もこういうふうに塩が作られてたわけですね。当時、塩は非常に人間の生活にとって貴重なものでですね、和歌山市でこういった大規模な製塩炉を作ってますね、奈良県とかに送ってたわけでございます。

当時、古代豪族紀氏がおりまして、紀氏がたびたび朝鮮半島に出兵したことが日本書紀にも書かれております。これが先ほど言いました、岬町の西陵古墳、全長約210㎝でして、これは自由にですね、古墳内に立ち入りすることができます。葺石なんかも所々に見えておりまして、非常に巨大な前方後円墳ですね、全国で第30番目ぐらいの大きさです。紀氏には紀直と紀臣がおったんですけども、紀直の方は中央豪族で葛城氏なんかと非常に仲がよい氏族だったんですけども、和歌山市周辺ですね岩橋千塚周辺では紀直が活躍しまして、6世紀の前半にかけて全長50㎝以上の前方後円墳を6基築造しておりまして、この時期に非常にこの紀直勢力が伸びたことがわかります。やっぱり継体の時期に、磐井の反乱とかあってですね、中央の大王の勢力とかが弱まりますと、それと反比例するように地方の勢力が勢いを増すと、そういったことが和歌山県でも見て取れます。

それから国の重要文化財に指定されております大日山35号墳の出土の埴輪ですね、かなり大きな家形埴輪があります。高さ140センチぐらいで、この埴輪なんかはですね、継体天皇陵の、今城塚古墳の家形埴輪とですね、作りとか構成が非常に似通っておりまして、継体天皇とですねこの大日山35号墳の被葬者が非常に密接な関係があったのではないかなど、そういうふう考えられております。それからですね、ちょっとわかりにくいんですけども、顔を前後に二つ持つ、全国でも一つしかない両面人物埴輪とかですね、或いは、上の方に二つ、鳥が飛んでおりますけれども、羽を広げて滑降する、こういった羽を広げた鳥なんかの埴輪もですね、全国でここだけしか出土をしておりません。非常にユニークな埴輪を昔の岩橋千塚古墳群の人たちは作っておったと、そういうことでございます。

それでですね、和歌山市の車駕之古址古墳、これが金製の勾玉、日本全国で唯一でして、これは去年の玉の展示でもかなり目玉商品になっておったところですけども、実物は約1.8センチで重さは1.6グラム、非常にちっちゃなものでね。車駕之古址古墳から出てきてまして、車駕之古址古墳はちょっと保存が厳しかったんですけども、この金製勾玉が出たこ

とによってですね、一気に保存のですね、ブームが、住民の方とかマスコミに広がりまして、この金製勾玉一発でですね、古墳が守られた。非常に我々にとってはですね、ありがたい。神様のような勾玉でございます。

それからですね、同じく和歌山市の楠見遺跡では初期須恵器なんかがたくさん出ておりまして、やっぱり紀の川の下流なんかはそういった文化ですね、朝鮮半島から文化が非常に早い時期から広まっております。それから大谷古墳ですね、国の史跡で全長約70メートルぐらいですね。先ほどの埼玉県の將軍山古墳と同じようにですね、馬冑、それから馬甲が出ております。昭和32年に発掘調査されまして、我が国初の馬冑、馬甲ですね。それから家型石棺がありまして、これは熊本県の阿蘇の方の溶結凝灰岩だそうでして、熊本からはるばる和歌山市まで運ばれておると。熊本の方は昔、古代豪族で肥君がおったんですけども、そういった肥君と紀氏がですね、非常に仲がよかった、そういったことがですね、考古学の出土遺物の中から伺えます。

これがですね、大日山70号墳の横穴式石室です。これは平成8年に私が発掘調査して、見つけた古墳の石室でございます、その中でですね、鍛冶道具類が出てきております。それからですね、朝鮮半島製の黒っぽい土器も出ておりまして、どうもこの古墳に葬られたのは朝鮮半島から渡来した鍛冶工人ではないかなと、そういうふうな感じがしております。普通岩橋型の石室でしたら羨道がですね、左側につくのが、すべてですね、すべての岩橋型の片袖式の横穴式石室は羨道が左側につくんですけども、これがセオリーですね、右側についておる。そういったところからですね、やっぱり渡来工人かなと考えております。

天王塚古墳の人の石棚、石梁ですね、垂直な石や梁が全部で8本がありまして、玄室の高さ、5.9メートルもありまして、非常に石室の高さが高い、全国で第2番目の高さです。それで古墳時代後期にですね、横穴式石室がだんだんだんだん、背が高くなるんですね。どうもなかなか原因がわかりにくかったんですけど、やっぱり私が行き着いたのは仏教伝来ですね。仏教伝来によって、祭祀が古墳の石室の中でも行われるようになって、その中にも何か火を使ったですね、そういった祭祀が行われて、より石室の中で炎がゆらゆらとゆらいでですね、そういった荘厳さのなかにだんだん石室が高くなって、それとともに供養する土器なんかもだんだん長大化していった。その仏教の中に、拝火教のゾロアスター教なんかも、ペルシャあたりから入っていたのではないかなと、ちょっとこれは言い過ぎかもしれませんが、そういった、考え方もできるかと思います。それで、先ほども言いましたけれども、こういった仏教文化が広まってですね、やがて古墳自体も作られなくなって、古代寺院が全国各地で開かれるようになってきております。以上でございます。

【松尾】 ゾロアスター教まで広がっていきまして… 刀剣はどこに行ったんだと皆様思っておられるかもしれませんが… 最初に言われたように、紀伊というのは紀の川で大和とつながった王権の港湾があり、朝鮮半島、外界との文化の窓口であるというのが非常に大きな特徴だと感じました。若狭さんが上毛野の例でお話になったように、雄略朝期に大量の渡来人が来て地域を開発していったり文化を変えてく、生産力を発展させるという、そういった外来の文化が地域社会にとって大きなインパクトを与えたんだというお話でした。そのような外交を誰が担っていたのか、という点について考えていきたいわけですが、この辺り若狭さんはどのようにお考えですか。

【若狭】 紀氏が外交を取り仕切ったという話が今ありましたけれども、当時の王権の役割分掌は地方豪族も含めて、豪族たちが王権の要務を担っている、王権の委任を受けて活動するのが基本フォーマットですね。外交は何も紀氏だけではなく、北部九州の豪族もそうですし、吉備の豪族も担っております。その中には、東国の豪族も当然含まれていたということなんです。日本書紀の中には、群馬県地域の豪族の上毛野君氏の活動がたくさん書かれていまして、神功紀には、上毛野氏の祖、荒田別・鹿我別が將軍として新羅を攻めた、軍事行動を行っていると言われております。さらに、その後に百済王と会見したという記事があります。応神紀にはこの荒田別・巫別が百済に派遣されて、当時最高の学者だった王仁に連れて帰ったとあります。それから仁徳紀には竹葉瀬、あるいは弟の田道という人を將軍と



海を渡った東国豪族（文献伝承・史実）

○日本書紀

- ・神功紀……上毛野氏の祖、荒田別・鹿我別が將軍として新羅を攻め、百濟王と会見
 - ・応神紀……荒田別・巫別を百濟へ派遣。学者の王仁を招聘。
 - ・仁徳紀……竹葉瀬を詰問使として新羅に派遣。弟の田道が將軍として新羅を攻め、四邑の民を連れ帰る
 - ・舒明9（637）年……大仁上毛野君形名が蝦夷征討の將軍となる。負け戦となり、妻が「祖先は青海原を渡って武名を高めたのに」と激励し、奮い立って勝つ。
 - ・天智2（663）年……上毛野君稚子。將軍として白村江の戦いに参戦。城を攻め取る。
- 常陸国風土記
- ・神功皇后の時、行方の古津比古は三度韓に派遣された。

して遣わして、新羅に勝ち、四邑の民を連れ帰ったという記事があります。こういったものが、日本に入ってくる渡来人の祖先伝承に結びついていくと思います。その後も舒明9年、これはもう史実だと思いますけれども、大仁上毛野君形名が蝦夷征討の將軍として行き負けそうになる、そんな時に、一緒に行っていた奥さんが「あなたの先祖は海の向こうで活躍したのに、あなた情けないですね」って言って激励して旦那が勝った、という話があるんですけども、この頃になりますと上毛野氏は地元にもいながら中央氏族になってるということがわかります。それから663年の白村江の戦いですね、唐・新羅連合軍に倭が大敗した、その時にはこの上毛野君稚子というの

が將軍の1人として陸戦を行ってまして、彼は勝っている、ということですね。軍事力をもって王権に仕えるという性格をずっと持ってるんです。そういう中で半島とコネクションをつけて、渡来人を呼んで来ているということがわかるわけですね。また、常陸国風土記の中にも神功皇后の時に、行方郡の古津比古という豪族が3度、韓に派遣されているという記事がありますので、東日本の豪族もまた王権の一員として幅広く対外交渉を行っているということが推定されるわけです。

【松尾】 非常によくわかりました。とかく、外国との交渉というと、王権の中枢から国の代表としての使者が遣わされて、国家代表対国家でやりとりをするように思いがちですが、実はそうではなくて、上毛野氏や吉備や北部九州といった様々な地域の豪族たちが、それぞれの王権の一部のチャンネルとして、軍事行動を中心に派遣されたりしている。筑紫君磐井は王権の意思に反して新羅と結んで、任那への介入を阻止しようとした、というように各地の豪族たちは独自のチャンネルも持っているらしいということが見えてくるわけです。そこで、日本書紀などの記録に残ってこないような、当時のモノの動きから、そういった複数チャンネルある交流をどのように読み取れるのか。ディスカッションではまだ一度も発言をしていただけていませんので、皆さんお待ちかねだと思いますので、金さんにぜひお聞きしたいと思うんですが。

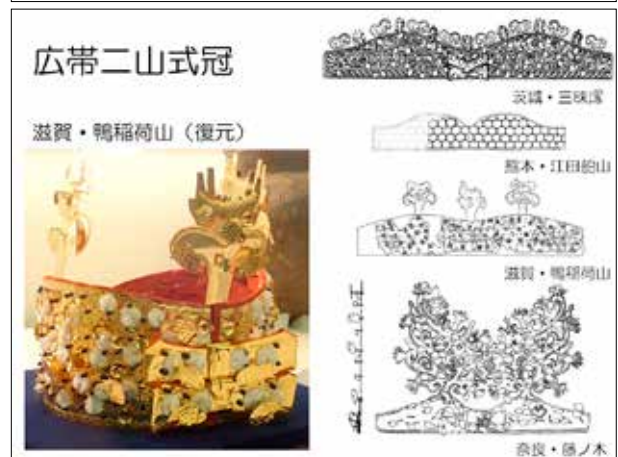
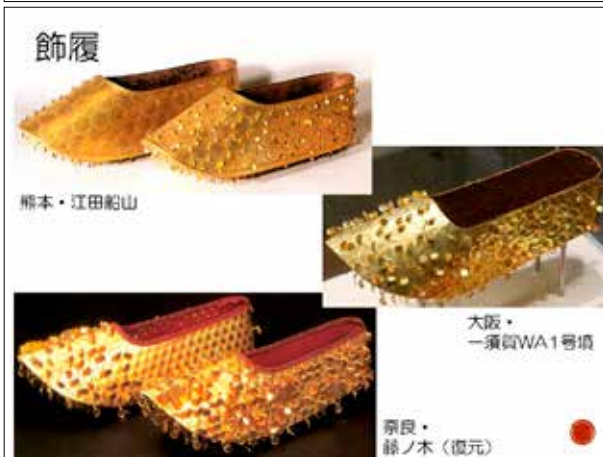
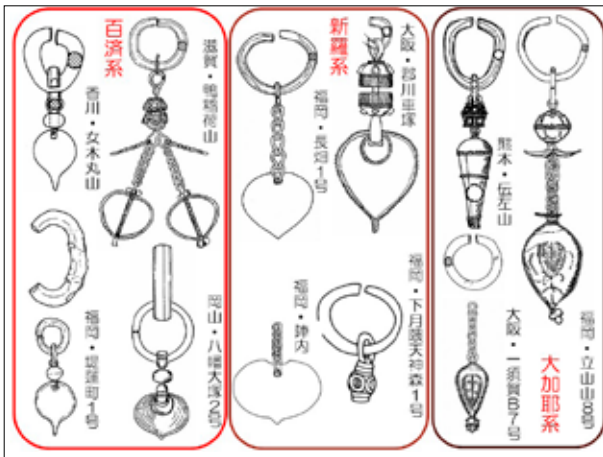


【金】 刀剣じゃない話をするんで恐縮なんですけど…私は刀剣の他にもいろいろキンキラキンのもの、金製とか銀製とか、貴金属で作った装身具の研究をしています。その手のものが出土したら、先ほど申しましたように、とりあえず「朝鮮半島からもたらされたものだ」というお話になるんですが、例えば、5世紀代に出土する耳飾を見ましても、いろんな種類のいろんなデザインのもものが混在しています。それは先程刀のお話でも言及したように、それぞれの耳飾が朝鮮半島の別々の地域からやってきているからで、その系譜の違いが形の違いに反映されているわけです。なので、耳飾の研究も、朝鮮半島の資料との詳しい比較検討が必須なんですけど、ここで触れておきたいのは、この種の「長い鎖がついている耳飾」の一群についてです。これらは従来、大加耶からもたらされたものだ、と認識されてきました。でも、これも日韓の資料をマニアックに見て回ったところ、意外と、日本で作っている可能性が高いんじゃないかと、そのように今考えています。大加耶で出土しているものを詳しく見ていくと、やっぱり日本の資料とはいろいろと異なるポイントがあるんですね。これも詳しく話をすると、また改めて



70分話さないといけなくなっちゃうんですけど、とにかく言いたいのは、耳飾でも意外と日本で作っているものがありそうということです。

他には、この「飾履」という金工品、これは亡くなった人の足に履かせるお葬式用の飾り靴なんですけど、朝鮮半島と関係があると言われていたものの、詳しく見ていくと、直接朝鮮半島からやって来ると明言できるものはほとんどないんです。熊本県江田船山古墳の飾履なんかは向こうから直接来ているようなんですが、藤ノ木古墳のものなど、よくよく見ると、どうも朝鮮半島の出土品とはやや違う、日本で作っている可能性のある資料だということがわかります。冠を見ましても、さっきの耳飾りみたいに、新羅や百済といった、いろいろな地域に系譜をもつ冠がそれぞれ出土しているんですが、一方で「広帯二山式冠」という、日本列島独自の冠とされる朝鮮半島にはない形の冠が一定数出土しています。ということは、だいたい5世紀の後半から6世紀の前半ぐらいまでには、こういった金工装飾品を作れる技術者が日本列島内に存在していたということになるんですね。もちろんそれは、日本列島内で独自に技術を編み出していたというわけではなくて、やはり朝鮮半島からモノとともに技術者がやってきていて、彼らが日本に定着して製作に従事した結果だと考えるのが自然です。しかしそこでまた「舶載品ラッシュ」の話ですが、5世紀代に日本列島に定着していた技術者の存在を前提にすると、舶載品ラッシュの時期にみられる多くの「半島系文物」は、実際どれが舶載品で、どれが列島製なのか。新たにやってきた渡来工人在日本で作ったものなのか、あるいは日本に「もともといた渡来系の工人」たちが作ったものなのか。そうした問題をしっかりと検討しないと、本当に複雑で、容易にはいかない、ということになってまいります。でもその検討をしないと、いわゆる「渡来人」たちの実態は見えてこない、こんなふうに考えています。



【松尾】 私が大学で考古学を学んだのは25年ぐらい前なんですけど、その時のお師匠さんが、日本の古墳時代馬具研究のパイオニアと言われた先生だったんです。当時、「先生これ、どこ産ですかね？」と聞くと先生は「これは舶載品やろ。」「なんでわかります？」「こんな日本で作るん無理やがな。」「じゃ先生、こっちはどうですか？」「こりゃ国産や。」「なんでですか？」「そんなんいっぱい出とるやないか。」と、こんな感じだったんですね。決してお師匠さんを揶揄する訳ではないんですけど、25年前は確かにそういう状況でした。その後、韓国内での古墳出土品に関する研究は飛躍的に進みましたし、さらに大きいのは、日本の若手研究者が、図面や写真で研究するんじゃなくて実際に韓国に行って、現地の資料をしっかりと自分の目で

調査する。金さんも2年間ですかね、慶北大学校に留学されて、しっかりと向こうの資料を見てこられて、同じ目で日本の資料を見る、そういうスタイルの研究が近年、飛躍的に進みました。それによって、技術的に難しいから舶載品とか言っていた時代と全然研究レベルが違って、すごく細かい観察から、東アジアの大きな出来事との対応を議論するような、非常に面白い研究段階に達している、ということです。

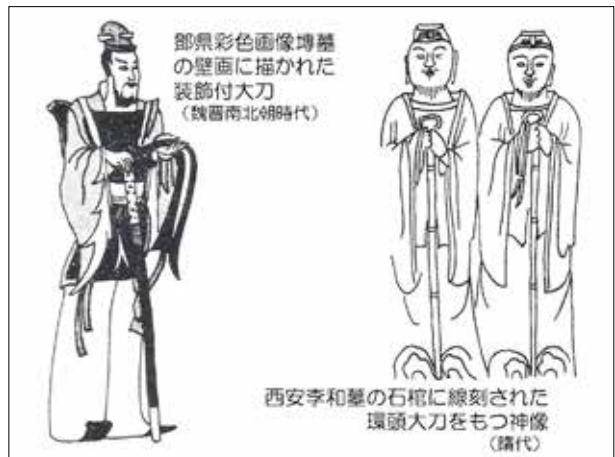
ここまで各地の古墳の特徴や、朝鮮半島との文化のやりとりというのがだいぶ見えてきたわけですけど、ここからは刀剣から何がわかるか、という話に入っていきたいと思います。やはりですね、日本の古墳時代で一番代表的な刀剣を一振りあげろと言われたら、私は埼玉稲荷山古墳の鉄剣じゃないかなと思うわけです。有名な象嵌で文字が書いてあるやつです。そこからひもといていきたいので、青笹さんどういふ剣か紹介いただけますか。

【青笹】 はい。古墳や銘文の概要は資料集に記載していますので、そちらをご覧くださいとしまして。辛亥年については、現在471年がほぼ定説となっております。宋書倭国伝に、倭王武が478年に宋に使いを送ったという記録が残っております。この鉄剣にはワカタケルという大王の名前が出てきて、ワカタケルが倭王武で雄略天皇だというのがポイントになるのと、ヲワケという人物が雄略大王に杖刀人としてお仕えしていたことがわかっております。この杖刀人というのは「人制」という原始的な官僚制度の中で出てくる職業で、後に出てくる部民制という制度の前段階の組織と言えます。この杖刀人というのは部民制の段階になると丈部という組織になるわけなんですけれども、埼玉稲荷山古墳の周辺ではその後に小見真観寺古墳という古墳から頭椎大刀が出土しておりまして、平安時代になると近くの小針遺跡から「丈部鳥麻呂」と書かれた石製紡錘車が出土しています。これらのことから、杖刀人がみられた埼玉稲荷山古墳の周辺で、後に丈部という名称が見られる点は注目できるかな、と思っております。



【松尾】 非常に貴重な資料です。5世紀後葉、471年に、人制という仕組みをもって地方の豪族と大王が奉仕関係を結んでいた、ということが剣に書いてあるんですね。この、剣に書いてある、っていうところが重要なミソだと思うんです。基調講演にもありましたように、やっぱり刀剣っていうのは一義的には人を傷つける、殺傷するための武器ですよ。恐ろしいものであります。しかし、どうやら古墳時代の刀剣には武器という即物的な性格を超えた何らかの意味性を持たされているらしい。だからこそ、後の丈部に継承されるような、杖刀人という職掌が彫られていると思うわけです。そういう刀剣の性格は、はたして日本独自の文化なのか、それとも東アジア全体で何らかの意味合いを持たされているのか、そのあたりを金さんにお聞きしたいんですけど。

【金】 同じ時代に中国でどのくらい装飾付大刀が出土しているのかというと、実はほとんどわかってないんですね。それは、お墓にモノをたくさん埋める習慣というのが、中国では少し早い段階で衰退してしまっているからです。なので、出土品からは確かめにくいんですが、その代わりそのお墓に描かれた壁画なんかを見てみますと、(図)のようなものがあります。この人、刀を持っていますが、どう見ても戦場の最前線で戦う兵士ではなさそうですね。どっちかというとなんか文官といった感じの人物です。この人が杖のようになっているもの、これは装飾付大刀だろうということが見てわかります。さきほど出ていきました杖刀人の話、その「杖刀」というのと何か関わりがあるかどうかわかりませんが、ちょっと時期が下の隋代の石棺に描かれた絵を見ましても、これあんまり顔がかっこよくないですけど一応神様の絵とされているんですが、やはり刀を前についているんですね。もちろん、敵を倒すため



の「武器」としての側面もあるかもしれませんが、その一方で見せるためのシンボリックなアイテムとして扱われていたということが、日本だけでなく中国でも確認できるわけです。

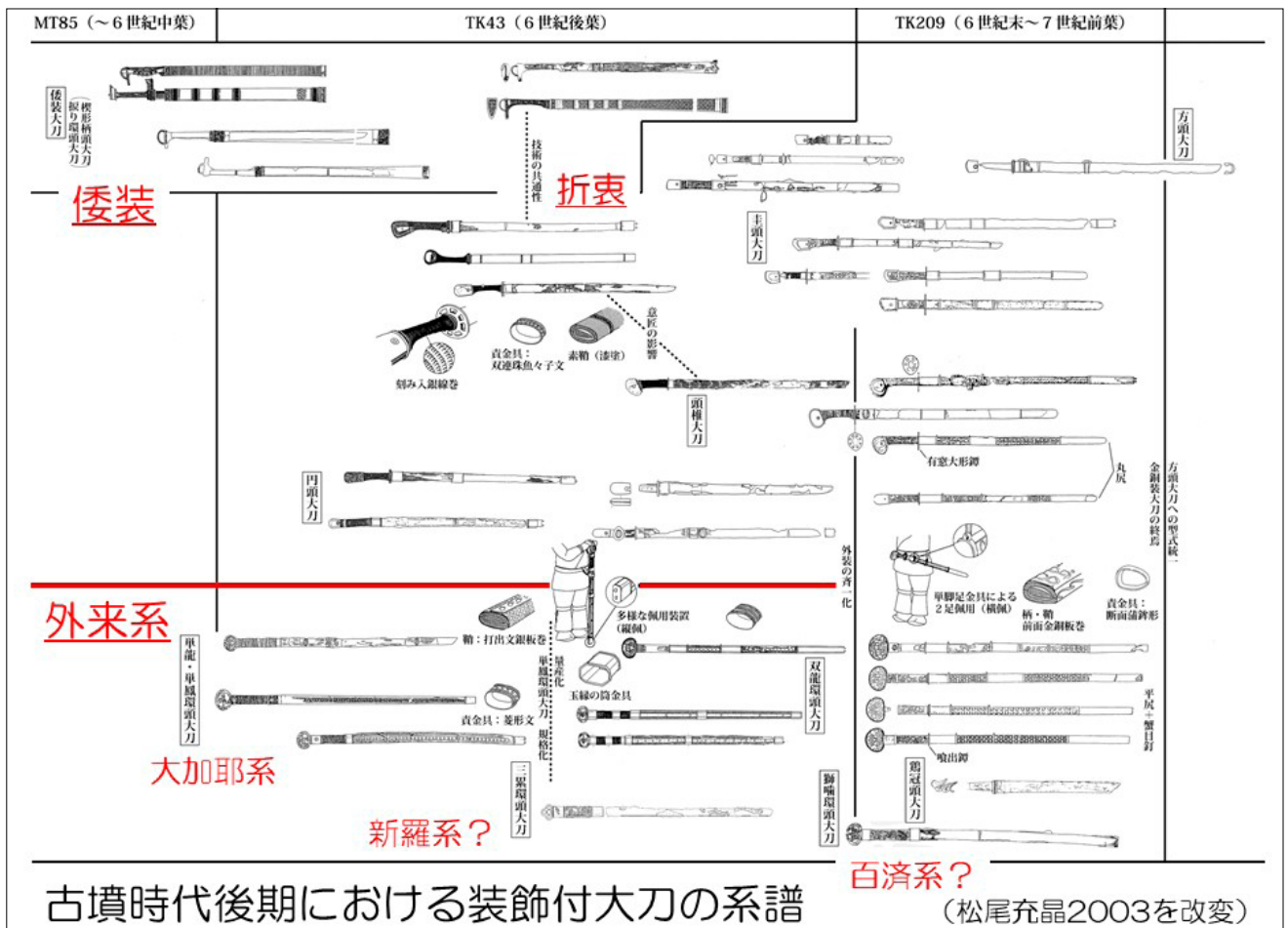
これらの絵のように、刀を杖のように立てて持つというのは、日本の出土資料の特徴からもわかります。写真は、単龍環頭大刀の鞘の先端に取り付ける金具ですが、先端部に釘が二つ打ち込んであります。蟹の目のように見えるので「蟹目釘」というんですが、刀を立てて杖のように持ったとき、地面に触れる鞘の先端が壊れないように保護するためのものとされています。要するに、このようなものがつけられているということは、杖のように立てる使い方を前提にしているから



だというわけです。日本でもやっぱり、さきほどの壁画みたいな感じの、「見せるための使い方」があったことは確かなのだろうと思います。基調講演でお話しましたが、新羅の天馬塚では、様々なきらびやかな装身具と一緒に刀が棺の中に納められていました。少なくとも装飾付大刀に関しては、実的な面よりも象徴的な面、シンボルとしての側面の方が、重要だったんだろうということはいえると思います。

それを踏まえて、なぜ古墳時代後期に、これほどいろんな種類の形がつくられたのか、という話に戻ります。最初、日本での刀剣製作の伝統の中で発展してきた倭装大刀がヤマト王権の中核で製作・配布されてきましたが、途中のある段階で、大加耶の工人たちを取り入れたりして、外来系の大刀が突如大量に作られ始めます。そのあと大刀の種類が一気に増え、様々な系譜、出自をもつ大刀がごちゃごちゃと混在する複雑な状況を呈します。そして最終的に、だいたい7世紀の半ばぐらいになると、「方頭大刀」という一つの種類の刀に収斂していきます。先の、「大刀のシンボリック性格」というのを考慮しますと、古墳時代後期の社会構造を理解するには、6世紀後葉からしばらくの間、多種多様な大刀を「作り分け」した理由をちゃんと考えないといけないと思います。

パネルディスプレイ



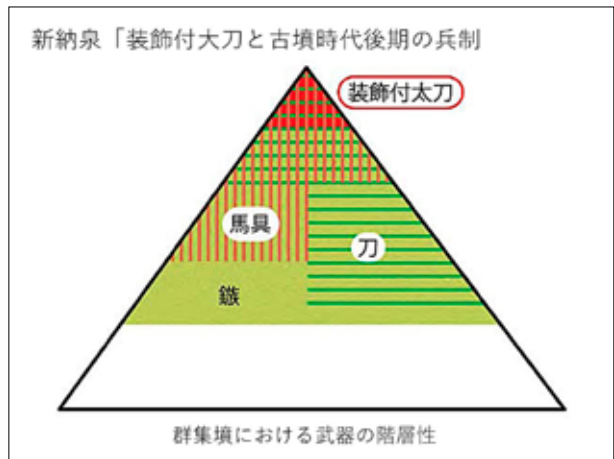
【松尾】 つまるところ、刀とは武器、軍事という暴力組織の面だけではない、何らかの意味性が持たされていたという点がまずひとつ。そして、前頁図は左が古くて右が新しい刀ですが、この時間幅って100年あるかないかなんですよね。この100年ぐらいの間には、バーツと色々な種類の刀がインフレーションして増える6世紀後半という時代があって、7世紀の前半にそれだけあった刀のパターン、種類が1種類になっちゃうっていうことは、そのバーツと増える時代には、刀の種類に大きな意味があったんじゃないのか、ということを示唆している、ということですよ。

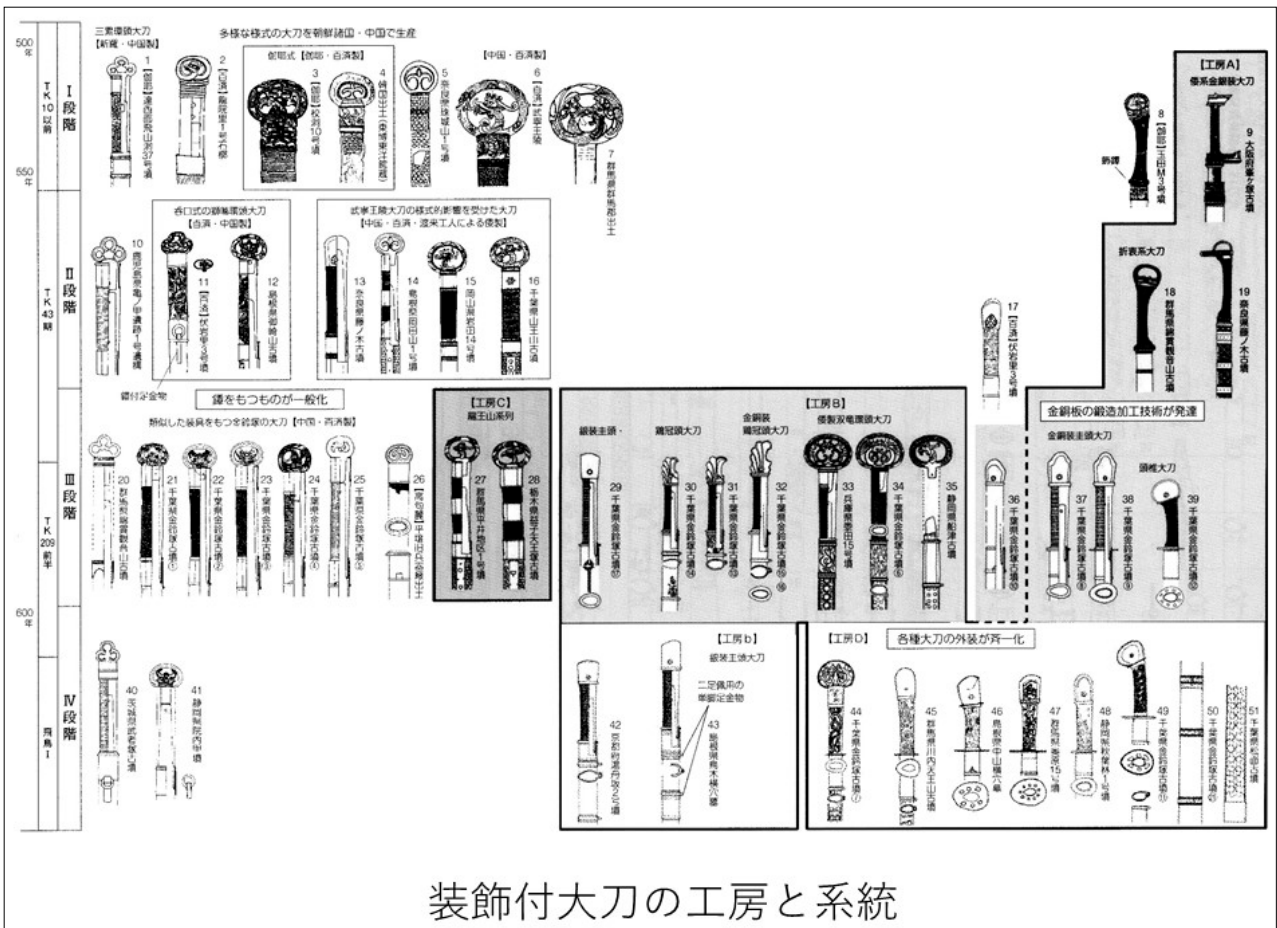
右上図は群集墳の場合、最上位の人物が装飾付大刀を副葬されていることを示したものです。確かにそうなのですが、大刀の原理はピラミッド構造、装飾付大刀を持っている人が一番力が強いみたいな一面的なものではなくて、大刀の種類が違えば役割が違ふんじゃないか、という説もあります。例えば町田章先生は環頭大刀を軍事権の象徴、一方、玉纏大刀・円頭大刀を別の祭祀権とか地域を支配する権限を表徴するシンボルとして持っているんじゃないか、と説かれました。一方では、特定の氏族と関係するんだという説もあって、例えば、グリップエンドか拳のような形の大刀、これを頭椎大刀と言いますが、これは物部氏と関係があるんじゃないかという説があります。また、今日会場にお見えの穴澤味光先生は、龍鳳環頭大刀を親衛兵の職能と結びつけて論じられています。地方氏族の首長が大王の宮都に出仕して奉仕する、そうした機会に職能に応じて選択的に与えられた、特定の役割に応じて授けられる刀があったんじゃないか、ということです。また、全国的に見ると、装飾付大刀の型式分布がある程度偏るんですね。平均的には分布しないんです。例えば瀬戸内側は大伴氏が基盤をもつブロックで、それに対応するように特定の大刀が集中するのではないかと、いう説もあります（上図）。

このような、大刀型式の違いはなぜ生じるか。次頁図は大刀を製作している種類な工房系列を技術面から整理したのですが、上が古くて下が新しい。右側が国産で左側が外来のものです。時期が下っていくと、舶載品と国産工房が入りまじって色々な種類を作っているという、そんな状況がわかっています。工房によって、大刀の形式が作り分けられている、という側面もあるわけですね。

さて、翻って各地の皆さん、こういった装飾付大刀の系統差とか分布とかが、それぞれの地域でどんな特徴があるのか、という話をまず三重県の角正さんからお願いします。

【角正】 はい。三重県の様相について、今、刀・剣・ヤリ・矛の集成をしている中で見ますと、前期に比べて後期になると刀が圧倒的に増えています。これは全国的な傾向と一致します。地域別に見ていきますと、先ほどお話した古墳の動向と対応するように、最初は伊賀が多いのが、だんだん全県に広がってくるというのがわかって参りました。その中で、キンキラキンの装飾付大刀はどれぐらい三重県にあるんだろうということを見ますと、実は、たった18例しかございません。そのうち三例が伊賀地域から、残りは、伊勢地域から出土しています。分布域は本当にバラバラでして、三重県では分布が偏らない、どこからでも出てきているんだけど事例は少ないということがいえるかなと思ってお



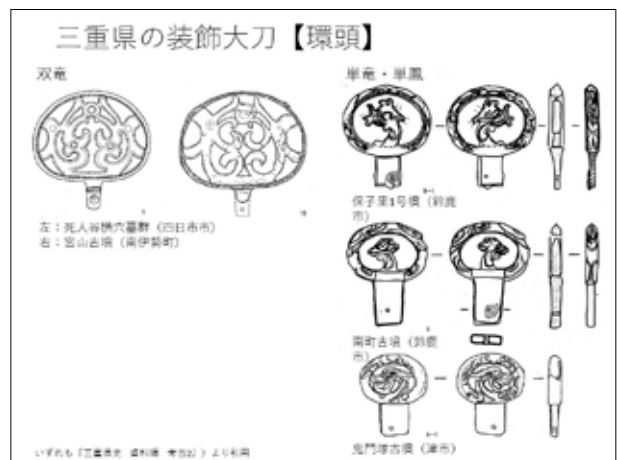


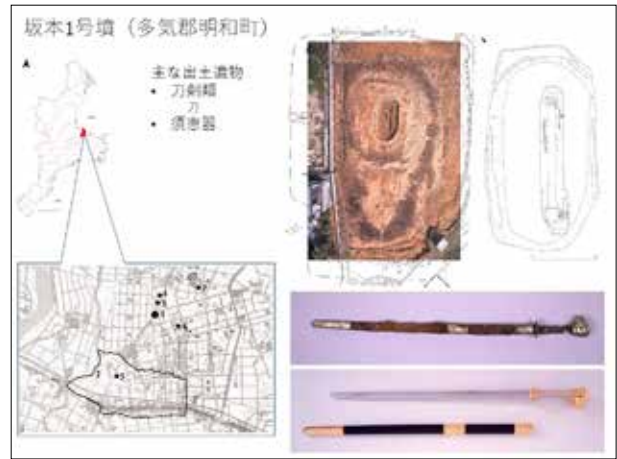
装飾付大刀の工房と系統

ります。金先生が基調講演で詳しく述べられた龍鳳環頭大刀は5例ありまして、双龍は2例、単龍鳳が3例あります。双龍は四日市と南伊勢で北と南、単龍鳳は鈴鹿市と津市ということで、北勢でもやや中勢寄り、県の真ん中の方に出土しているような状況です。これについては金先生から後ほどコメントいただければなと思っておるんですけども。

環頭大刀以外に、三重県としてご紹介させていただきたいのが亀山市井田川茶臼山古墳という古墳です。中勢寄りの県北西部というところです。ここの場所がなぜ大事なのかと言いますと、伊賀から東国へ抜ける、古代の東海道に近いというところに位置しておりまして、井田川茶臼山古墳の、鈴鹿川をはさんだ対岸には、単龍環頭大刀が出土した保子里1号墳があるんですね。ですのでこの辺りは東海道を押さえた有力な首長がいた地域ではないかというふうに考えております。井田川茶臼山古墳からは、銀象嵌で龍文を施した振り環頭の大刀が出土しています。

もう一つ紹介させていただきたいのが、多気郡明和町にあります坂本1号墳です。基調講演でも紹介いただきました、金銅装の頭椎大刀が出土しています。県内でも最も新しい7世紀前半の古墳なんですけれども、実は、この後7世紀後半になりまして、この隣接地には伊勢神宮に仕えた斎王が暮らしていた斎宮という役所が置かれます。伊勢から結構離れておりまして、私どもでは伊勢神宮に併せて斎宮にも来ていただきたいんですが、なかなか来ていただけないというのが悩みの種の一つなんですけれども。なぜ斎宮が神宮からこんなに離れた場所に作られたのか、というのは実は、古代史の一つの問題になっています。その理由の一つとして7世紀前半に、この坂本1号墳に葬られたような首長がいたから、それで斎宮の場所も選ばれたのではないかという説もあります。この古墳の被葬者は大変重要な人物ではないかなというふうに考えています。以上です。





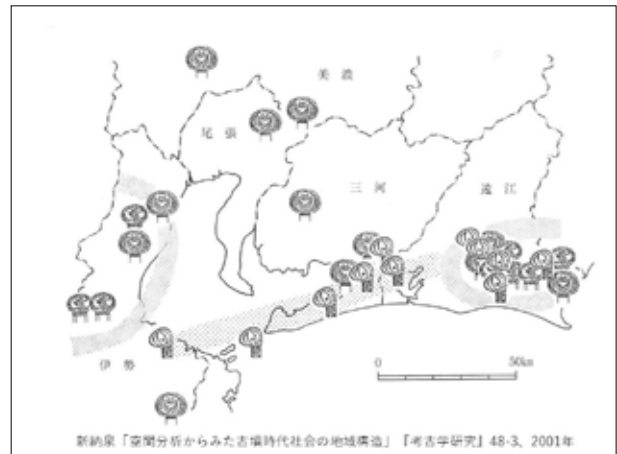
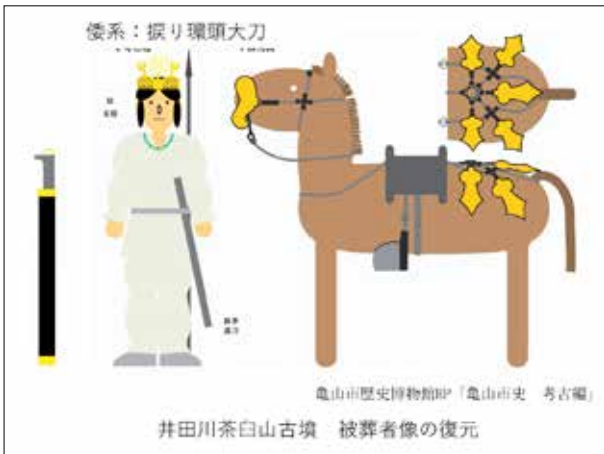
【松尾】 金さん、三重県の単龍鳳環頭大刀について、何かコメントがありますか？

【金】 えっとですね、アドリブに弱いんですね。この保子里1号墳例は非常に古いものですが、その後だんだん、作りがいい加減になっていて、鬼門塚古墳例はもうぐちゃぐちゃになって作ってる人も自分で何作ってるかわかんない。実はこれ時期差があるんで、分布っていうのを一つにまとめて話をすると、それはそれでちょっと難しいところがあるのかもしれないなということぐらいでしょうか。

【松尾】 ありがとうございます。さすが、アドリブも完璧です。重要なことをおっしゃいました。同じ種類が分布しているから、何か意味があると簡単に言えないんですね。同じデザインでも時期が少しずつ違っている可能性がある。すると、ストーリーも変わる余地がある、ということにも注意が必要だというお話だったと思います。

角正さんが紹介された井田川茶臼山古墳の被葬者は、振り環頭大刀という大きな立派な刀を持っていて、広帯二山式の冠、最新式の馬具も副葬されている。そして、おっしゃったように後の東海道の鈴鹿関の近くにあって、交通上の要衝に位置しています。また、屯倉と言われるヤマト王権の直営的な経営拠点みたいなところとも関係があるんじゃないかとも言われています。こういう首長が各地にあらわれるのが、継体大王の時代なんですよ。似たような首長があちこちに出てくるんです。交通や流通上の重要な場所を押さえる首長が、その地域では最も古い横穴式石室をもつ古墳としてぽんと出現する、日本海も瀬戸内もそうですが、港湾ごとにポンポンと押さえていくようにして6世紀前葉の列島支配が進んでいく、そういうあり方を振り環頭大刀は示しているんじゃないでしょうか。

また、先ほど斎宮の前身になったのではないかとされた坂本1号墳から出土した頭椎大刀ですが。大局的に見ると、伊勢南部から渥美半島へ抜けてさらに東海・東国へと繋がっていく、尾張勢力を避けるがごとく海上を通った交通路上に頭椎大刀が展開分布する、そういう指摘もあります。そういった点で、やはり思ったのは、最初に伊賀へ大和から古墳文化が入ることが象徴しているように、重要な交通路上に拠点的な重要な施設がどんどん展開して、地域を変えていくというのが三重県の特徴的なあり方だと感じました。あと、意外と裝飾付大刀が少ないですよ。これ全部三重なんです。って言う割には、あれっと思ったところでした。では続いて黒石さん、和歌山県の様相はいかがですか。



【黒石】 それでは和歌山県についてご説明させていただきたいと思
います。和歌山県はですね全部です、古墳の数が1600ぐ
らいありまして、それから今回刀剣類、今集計中ですけども、
わずか150例しかありません。14県の中でも非常に少ない
ところでございます。5世紀前半の海南市山崎山5号墳は、
鉄剣と青銅剣が共伴している非常に珍しい例でございます。
それから古い例で和歌山市晒山1号墳の鉄刀類。それから
5世紀後半、紀の川中流域の橋本市陵山古墳、これは直径
46寸のかなり大型の円墳です。短甲類とか、それから須恵
器とか土師器なんか出ておりますけれども、蛇行状鉄剣と
いいまして、くねくね折れ曲がった鉄剣が出ております。
ちょっと珍しいタイプですね。それから和歌山県南部にあ
ります田辺市磯間岩陰遺跡、国の史跡になっておりますが、
ここからですね鉄剣類とそれから鹿の角で作った鹿角製装
具等が出ております。直弧文が刻まれておましてそれに
赤色の朱が施されております非常に珍しい。こういうもの
は大阪湾沿岸から伊勢志摩、さらには房総半島の方に見ら
れてまして、海人集団ですね、そういった海の人たちとの繋
がりがあるのかなとそういうふうを考えております。先ほ
ど言いました和歌山市の製塩遺跡である西庄遺跡でもす
ね、鹿角製の刀装具が出ておまして、それから和歌山市
鳴神遺跡からも、木製の刀装具が出ております。

先ほど三重県の方が、裝飾付大刀がわずか18例しか
ないと言われたんですけども、和歌山県はそれより少ない
12例しかありませんので、若干ですね、分布とかの考察は
ちょっと難しいんですけども、和歌山市鳴滝1号墳の単
鳳環頭大刀振り環頭ですね、6世紀後半のやつです。それ
から和歌山市園部円山古墳は6世紀後半の直径25寸の円
墳から圭頭大刀が出土しております。花飾りの文様とかが
見られます。それから伝世品ですけども和歌山市岩橋千
塚の圭頭大刀ですね、ちょっと半分ぐらいしかありません
けれども割と関東なんかにも多いタイプの大刀かなと思
います。

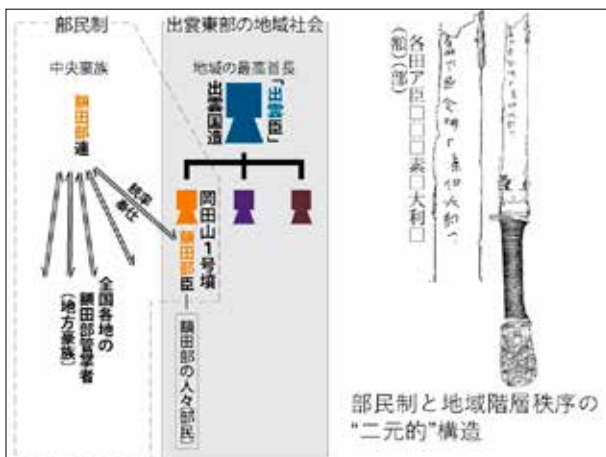
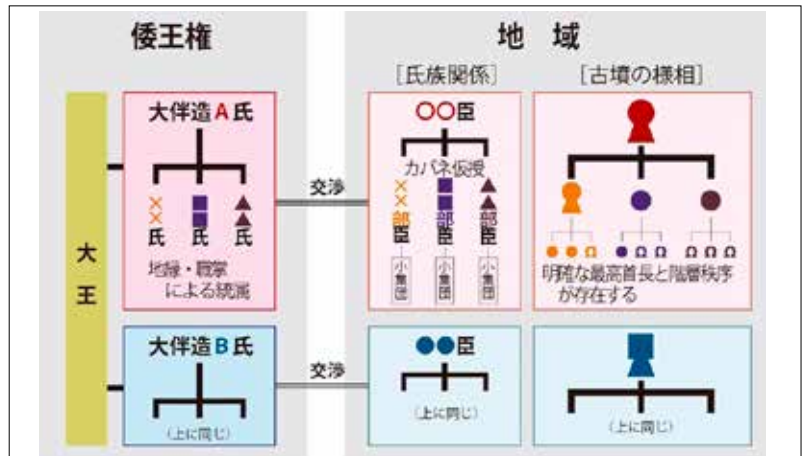
今回和歌山県の隠し玉なんですけれども、御坊市岩内1
号墳といいまして、7世紀中頃の一辺20寸近くの方墳から
出土しております、銀線の蛭巻大刀でございます。7世紀
中頃は、大化の薄葬令が出ておまして、古墳が非常に縮小
化していく時期ですよ。その時期に一辺20寸近い方墳は
非常に大きな部類です。この古墳ですけども、森浩先生
は有間皇子のお墓ではないか、そういうふう想定してお
りまして、有間皇子は西暦658年に白浜の牟婁の湯に温泉
湯治に行って、当時、斉明天皇とかですね、中大兄皇子も
そのあと行ってたんですけども、有間皇子が謀反の疑い
をかけられてですね、わずか19歳で処刑された。それは和
歌山市南側の海南市で処刑されたというんですけども、こ
の候補になります御坊市にですね、塩屋という地名があ
りまして、有間皇子の身の回りの世話をしていた従者、塩
屋連鯛魚ですね、その本貫というか勢力があったところに
この方墳が築かれておるというところで、皇子説も0%では



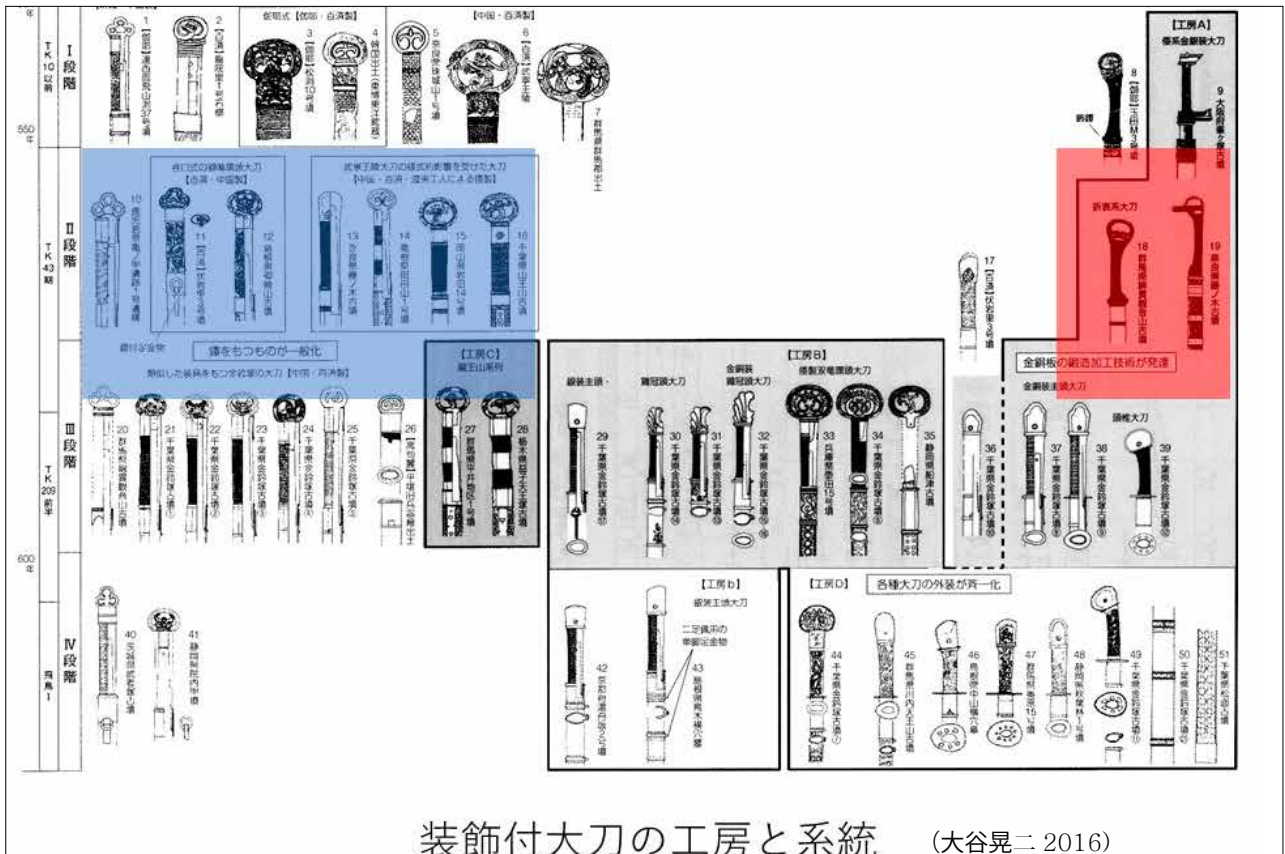


ないかなと思いますけれどもやっぱりそれを立証するものがない。平成 25 年にですね、県指定文化財にするためにですね、橿原考古学研究所にですね、この刀を持ち込んでレントゲン X 線撮影をしました。その時ですね、私がひそかに心震えてくる場所がありまして、何か象嵌銘でですね、有間とかですね、皇子とかですね、せめて鮎魚ぐらいあったら、と非常に心躍った瞬間だったんですけども、実はそういった象嵌は見られませんでしたね、ただしですね、古い時代のですが、修復技法が見て取れるということで、逆の意味で、橿原考古学研究所の研究所の方は、なかなか面白い修復技法でやってますねと、大体そういうふうなお話でございます。以上、和歌山県の状況でございます。

【松尾】 有間皇子というのは本来なら天皇になったかもしれない人物ですけど、反逆の疑いをかけられて殺されてしまうんですよね。「有間の銘文はアリマセンでした」ってダジャレを言うつもりじゃなかったんですか？(笑)。有間という象嵌はなかったようですが、日本で人の名前を刻んだ象嵌大刀として一番有名なのはやはり、すでに少し話に出てきました島根県松江市にある岡田山 1 号墳の大刀だと思うんですね。これ、何て書いてあるかという、刀身部分に銀の線で額田部臣□□と書いてあります。額田部臣というのはウジナ・カバネで今でいう名字みたいなものですから、ここには人名が書かれているわけです。その人物こそが、

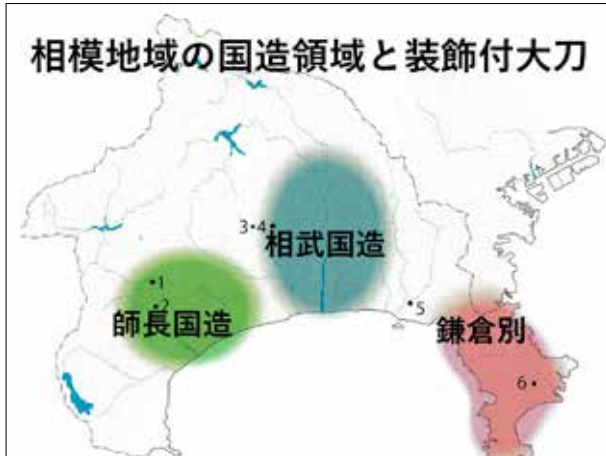


この大刀が副葬された岡田山1号墳という古墳の被葬者だろうと考えられています。岡田山1号墳の被葬者は、地域のナンバーワンのリーダーだったかというとは実はそうではなくて、最高首長である山代二子塚という地域最大のリーダーに従うナンバー2クラスの豪族なんですね。しかも額田部臣という氏族は、古墳が作られた場所から20kmぐらい離れたところに本貫地をもつ豪族なんです。なぜこんな場所に古墳を作るのか、気になるわけですが、ここでは部民制と呼ばれる古代の仕組みが重要になります。(前頁左下図) 岡田山1号墳の被葬者は、出雲国造である出雲臣の配下にいる人なんです。地域の中ではナンバー2というクラスでありながら、実は額田部という名前が表しているように、地方にいた額田部の部民と呼ばれる人々を仕切るリーダーなんですね。地域に君臨するだけではなくて、中央に額田部連という豪族がいて、それに従属しています。額田部連の職能は、のちの推古天皇である額田皇女を資養することなどでして、その経済基盤を支えるのが地方の部民たち、そしてそれをコントロールしていたのが部民の管掌者、いわゆる地方豪族たちでした。そうした役割の証として刀が与えられていることが読み取れるんですね。そうしてみると、この古墳の被葬者は、地域の中では出雲臣に頭を下げ、大和の額田部連にも頭を下げたんですね、身につまされるわけですが、二元的な複雑な社会構造の中に頑張って生きてたんだということが見て取れるわけです。もう一つ重要なのは、中小の地方豪族は個別に中央豪族と交渉してものを受け取っていたわけではないんですね。トップとなる地域首長を中心としたグループがあって、グループ単位で、中央の大王近傍にいる、例えば物部氏とか蘇我氏とかといったチャンネルと交渉していたということになります。そうなると、グループが違えば、中央の別々の大伴造氏族と交渉していたのではないかと、ということも考えられます。その点で面白いのは、出雲は東西が拮抗するという現象です。東部は前方後方墳、西部は前方後円墳が最上位の首長です。それぞれに副葬された刀をよく見ると、東部と西部で系統が違うんです。ということは、東部の首長が大刀を入手していた中央豪族と、西部は別だったんじゃないか、ということが想像がつくわけです。改めて裝飾付大刀の系統を見ますと、伝統的な倭装大刀と、朝鮮半島大陸に起源を持つ外来系の大刀が大きな2つの流れです。出雲西部は伝統的なものを、出雲東部は外来系の大刀をもっている。伝統的に軍事をつかさどる中央氏族といったら、物部氏が浮かびますよね。出雲西部は氏族分布や伝承などからみて物部氏との関係が深く、一方の東部は最終的に大型方墳を築いている点なども蘇我氏との関連がうかがえます。最終的には、6世紀の終わりになると物部本宗家が戦いに負けるわけで、その結果そういう東西差というのはなくなっちゃうんじゃないか、このように考えています。こういう主張をすると、全国的にはそんな出雲みたいに単純じゃないんだ、というように言われるんですね。どうでしょう、青笹さん、関東の様相は。



装飾付大刀の工房と系統 (大谷晃二 2016)

【青笹】 埼玉県だけでなく、いろんなどこの話もしなきゃいけないので、大づかみな装飾付大刀の話をここでさせていただきたいと思います。まずは神奈川県です。西から師長国造、相武国造、鎌倉別というふうにそれぞれ国造領域が位置付けられていまして、装飾付大刀は図のように分布しています。県西部に単鳳環頭大刀と県東部に単龍環頭大刀があり、圭頭大刀が点在しているというのが神奈川県の特徴だろうというふうに考えております。師長国造と相武国造にはそれぞれ対応するような形で双龍環頭大刀があるんですけども、鎌倉別についてはちょっとはつきりとしたことはわかっていません。



続いて東京都域なんですけれども、あんまり傾向がはっきりしていないので図面を示すだけにさせていただきます。埼玉県域なんですけど、北埼玉地域に古墳が集中しております。TK43 型式から TK209 型式に、刀がいっぱいワッとインフレするところからまとまるところまでの間で、大きい前方後円墳から装飾付大刀が出ていまして、前方後円墳の段階では倭装大刀に伴うものであったり、朝鮮半島との関わりの中でもたらされたと言われるような刀であったり、將軍山から出土しています。鉄鉾なんかも出ているということです。その隣にある小見真観寺古墳という前方後円墳の埋葬施設からは、頭椎大刀、圭頭大刀が出土しています。同じ行田市にある埼玉古墳群とも小見真観寺とも近い場所に八幡山古墳という円墳がありまして、方頭大刀の柄頭が出ています。先ほど金さんが蟹目釘のことを話された鞆尻金具も出ています。東松山市西原古墳でも、八幡山古墳とよく似た形の方頭大刀です。このように、TK43～TK209 の前方後円墳には頭椎大刀などがありますが、最後の段階で方頭大刀がでてきます。前方後円墳ではなくなった円墳の段階の八幡山古墳などで、方頭大刀が出てくるところは大きいポイントかなと思っております。富本銭を生産した官営工房である飛鳥池遺跡からも、方頭大刀の生産に関わるような大型の鳩目金具がでていることから考えますと、方頭大刀というのは近畿中央の政権による直接的な生産が確実に見ている先生もいらっしゃいます。そういうものと関係のない部分で、埼玉県全体の特徴でいくと群集墳の中のちっちゃい円墳から、透かしをもつ鏝にウワーって象嵌が施されているような大刀であったりとか、頭椎大刀などが出土するというのが、よく見られる現象です。ですので、話してきた古墳の事例でいくと大きい古墳の話に偏ってしましますが、大多数は小さい古墳の事例になります。そういうのは何が背景なのかなというのを考えていくと、近畿中央政権を構成する大王家や、その周辺の中央豪族、そういった人たちとの関わり合いの中での重層的な構造というのが想定されているんだろうなというところを今のところ考えております。以上です。



【松尾】 私が東京も神奈川もやってくれなんて無茶なお願いをしたばかりに困らせてしまいました。さすが、埼玉県の若手ホープとして活躍中の青笹さんならではの、真面目に丁寧にまとめていただきました。いろんなことがわかるわけですけど、さきほど杖刀といって、杖のように刀を持つという話がありました。そうすると、グリップエンドにあたる柄頭の部分が一番よく見えますよね。そのデザインが違うと、見る

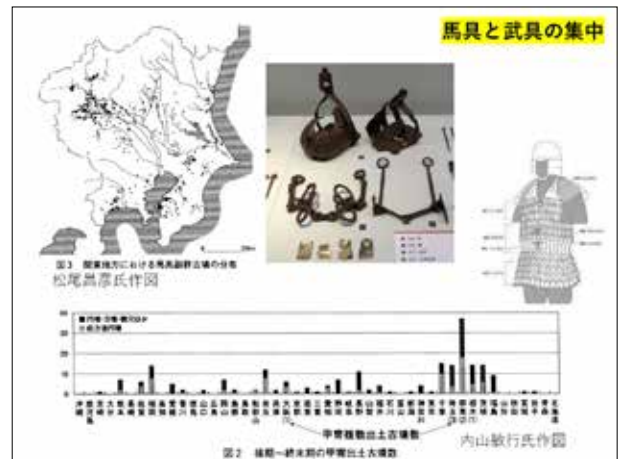
人にとってはぱっと持っている大刀が違うことがわかるわけですが、そういう違いだけじゃなくて今青笹さんがおっしゃったような、鏢のところに銀象嵌するようなスタイルの一群があるんですよね。銀色の鉄に銀で象嵌するんですよ、離れたら見えないんですよね。そのような独特な技法を用いた大刀の分布にも意味があるようですから、やっぱりいろんな原理で大刀系統ってというのは動いているらしいということが読み取れると思います。次に若狭さんには、上毛野の状況をお聞きしたいのですが、いかがでしょうか。

【若狭】 はい。大刀のインフレーションが起きる6世紀後半、群馬県地域はですね、大刀も多いんですが馬具も多いんですね。群馬県域の馬具の出土数は日本一なんです。小札甲という武具の数も日本一です。内山敏行さんがまとめていますが、群馬県地域は飛び抜けて多いという状況がわかります。装飾付大刀は、今発見されているもので170振です。これも日本一ですね。

では分布に出雲のような規則性があるのかというと、それが見られない。徳江秀夫さんが作られた大刀型式の分布図がありますが、これを見ても規則性がないわけです。ですから特定氏族と結びついているのか、という点もなかなか言えないですね。そして、この時期は前方後円墳ラッシュでもあるんですが、前方後円墳の第1ランクからは環頭大刀は出ないんですね。第2ランクから出土し始めて、第3第4ランクまで出土例があります。第4ランクっていうのは10[㌢]ぐらいの円墳なんですよ。環頭大刀の多くはそこから出ていて、その地域最上級の首長の墓からは出ない、という状況があります。

群馬県域は、出雲と同じように大国造国です。豪族たちがいっぱいいて100[㌢]級前方後円墳はたくさんあるんですが、それをまとめる大国造上毛野国造がいます。そしてその国造は地域を統べるとともに、先ほど將軍として奥さんに怒られた人のようにですね、すでに中央にも拠点を持っていてヤマトにも上毛野君氏がいる。本貫地が二つあるので両貫制というふうに呼ばれていますけども、中央氏族として成功している上毛野君氏が、中央で多様な大刀を入手して、配下の、国造傘下の豪族たちにそれを分配しているということも考えられるのかなと思います。

ですから第4ランクの10[㌢]の小古墳の被葬者までヤマトの豪族と結びついてはおらず、中央からまとめて入手したものを、大国造が分配すると、そういう在り方も考えられます。そうすると、大刀のマーケットってどういう物なんだろうかと、中央氏族の工房から非常に限られた人たちだけに行くのか、そうではなくてある程度、自由な流通があるのか、と



れる制度に対応した刀というものもあったようです。

でもこのように、文字記録がない6世紀とか7世紀前半の地方と王権の関係とか、国の成り立ちの過程っていうのを刀剣から確かに読み取ることができるっていうのが今回、いろいろわかってきたと思います。先ほど青笹さんが方頭大刀の紹介をしてくださいましたが、古墳時代にいろんな種類がある大刀が、7世紀前葉のどこかで統一されます。おそらくそれは、有名な冠位十二階などの、刀ではない別の原理で身分とか役割とかを示すという制度に変わっていくからだと考えられるわけですよね。そうした7世紀のあり方について、最終的に東国はその後、律令国家に向けてどうなっていくんでしょうか。

【若狭】 6世紀後半はたくさんの方後円墳を造っているわけですね。旧来の権威を認めながら、王権が手を伸ばし、名代を立てたりしている。経済的にも人的にも軍事的にも、東国に依存してる状況だと思うんですよね。やがて前方後円墳がなくなっていきます。それが律令国家の成立に即つながるのではなくて、大刀のインフレーションが一番盛んなときに東国では7世紀前半の大型古墳造営で王家に迫る大墳墓、80メートルの大円墳、大方墳を造っております。有名なのは下総の龍角寺岩屋古墳（80メートルの大方墳）ですね。同じ頃の畿内の古墳は蘇我馬子の墓といわれる石舞台が50メートルの方墳、崇峻天皇の墓といわれる赤坂天王山が50メートルの方墳です。最近見つけた小山田古墳、蘇我蝦夷とか舒明天皇の墓かと言われてますが、これが80メートルの方墳です。それほどの大古墳を東国で造れている、造ることを承認されている、野放しかもわかりませんが、そういう状況が7世紀前半の東国にあるということなんです。やはり並々ならぬ経済力を持っている。

同じころの7世紀中頃、聖徳太子の子の山背大兄王は蘇我入鹿に攻められるわけですね。そして逃げる時に側近の三輪文屋が、「馬に乗って東国に詣でて、乳部を本として興って還り戦えば、必ず勝つ」というように言っているわけです。東国の乳部（壬生）は山背大兄など王家の名代で、その部民を元にしてたてば勝てるんだと、言っている。これは軍事的にも東国に依存していることにはほかならないわけですね。この壬生が各地、特に東国各地に分散していて、その中の大壬生氏、壬生の中の壬生こそが、この岩屋古墳の主ではないか、と言われてしているわけです。

このように、7世紀前半はまだ東国に、王権が依存している段階だといえると思います。これが解消されるのが、東国国司の派遣。蘇我氏が滅んで大化の改新が始まりますが、その時に政府が行った最初の施策が東国国司の派遣なんですね。西国国司ではないです。やはり不穏な東国をまず押さえるというのがこの政策だと思います。6月に蘇我氏が滅び新政権が樹立され、8月には東国国司が派遣されています。一つは戸籍を作って田畑を調べなさいと。領域設定ですよ。それから国造・郡領を都に随伴しなさいと。ただその時にですね、彼らが「先祖の時からこの屯倉を預かってこのコオリを治めてきた、だから連れてってくれ」という嘘をよく査定しろっていうふうに言ってるわけです。こういう人たちが俺が俺がと言っているのは7世紀前半、或いは6世紀後半の方後円墳が多出している、東国の背景なんですね。もうどんぐりの背比べの人たちが我が我がといってくるのを査定してきなさい、そうして施行されるのが評制です。評政が施行されて、地方豪族を完全に官僚化する、そして武器を収公します。軍事力の削減、軍縮ですね。そして大刀も、この時に方頭大刀が変わっていくということで、初めて東国国司を派遣して東国を抑えてこそ、本格国家形成になっていったと考えられます。大刀インフレーションの終息と方頭大刀への変化は、連動していると言っていいじゃないでしょうかね。

【松尾】 雄略期から渡来系の技術を導入して開発を進め、生産力が増大したということが、最終的には律令国家誕生の時期まで続いていく、東国の重要性というのも東国国司派遣までは継承されるということでした。西日本では前方後円墳なんてとうの昔のことっていう時に、大きな古墳を作り続けている東国の特徴があるということです。一方で、7世紀中頃には、各地の重要な神を祭らせるために神郡（評）、今で言う神領民みたいな集団が国家的に定められるんですけど、どこに置かれたかというところ、黒石さんのおられる和歌山県、角正さんの伊勢の国三重県、そして島根県にある出雲なんですね。宗像のある福岡県の方にもいてもらえばちよ



うどよかったんですけども。神郡がどこに置かれたのか、一言で言うと国家的な交通の古い拠点なんですよ、関東の場合は安房や常陸です。出雲って交通拠点なのって思われたかもしれませんが。話が長くなるので述べませんが、やはり出雲も外界へつながる地域でした。こうした地域と、広大な土地に恵まれて生産力が高い東国との対比っていうのも非常に良く見えてきたんじゃないかと思います。ここまで私自身はたいへん面白かったんですが、私のさばきが悪くて時間が来ちゃったので、大変恐縮ですけど、感想と今後への展望も含めて、黒石さんから一言ずついただけますか。

- 【黒石】 やはり和歌山県は装飾付大刀が非常に少なく、群馬県は170振とか言われましたけれども、もうこれ以上あんまり資料も出そうもないんで、なかなか研究自体は和歌山県は寂しくなりますけれども、やっぱり和歌山県の観光PRしますと、関東地域からですね白浜空港まで1時間ぐらいで、飛行機で飛べます。白浜にはかわいいパンダなんかもいっぱいいますし、これからの季節、和歌山県南部には暖かい温泉がありますし、それからクエ鍋とかですね、名物料理もありますのでぜひですね、和歌山県にも興味を持っていただきまして、白浜空港の方においでいただければ、大変嬉しいと思います。以上でございます。
- 【角正】 三重県も和歌山とあまり変わらない状況ですので刀剣の話はあまりできません。せっかくですので、令和初の初詣はぜひ伊勢神宮にお越しいただきまして、新しい御代を皆さんで言祝いでいただければと思います。ついでにちょっと足を伸ばしていただきまして、斎宮の方もお寄りいただけますと大変ありがたいなと思っております。斎宮歴史博物館は1月4日から開館しております。ぜひ、お越しくださいませ。
- 【青笹】 神郡の無い埼玉県でございますけれども、埼玉古墳がございます。埼玉古墳群は特別史跡にもなりますし、今日お話に出てきた金錯銘鉄剣もご覧いただけます。多分、壇上にいらっしゃる皆さんの地域の中では唯一、ここからバスで行けるところでございますので、皆様お運びください。ありがとうございました。
- 【金】 僕も琵琶湖とひこにゃんの宣伝をしたほうがいいかもしれませんが。真面目な話をさせていただきますと、基調講演では氏族と刀を結びつけるのは難しい、面白い話だけどなかなかできないという話をしまして、基本的には逃げてたんですけども。今日のお話を伺いまして、やっぱり古墳時代の後半から飛鳥時代にかけてを考えるにあたっては、そういった文献の方とどうすり合わせていっていかっていうのをちゃんと真面目に考えなきゃいけないなと思います。大変勉強になりまして、とてもいい機会をいただけたと思っております。ありがとうございました。
- 【若狭】 今日は王権と地方の関わりが中心的な話になったんですが、地方同士の横の繋がりがっていうのも必要だと思うんですね。特にこの6世紀後半というのはそういう時期で、例えば出雲にある石棺式石室が栃木県の下野にあたりします。それから三河型の石室っていうのが展開したりするんですね。ですからそういう跛行的な豪族関係、王権を介さないものを読み解いていくことによって、国家形成のいろんなプロセスがもっと明らかになるかなと思いますので、ぜひ第2弾でやっていただきたいと思います。どうも今日はありがとうございました。
- 【松尾】 若狭さん、金さんのおかげで、何とかディスカッションを取り収めることができました。お気づきだと思いますけど、今日はまだ中間発表会です。最終成果発表会ではないんですね。できれば、来年、再来年も続けて、このような講演会も開催したいと思っておりますし、我々14県で力を合わせて一つの目的に向かうというのは過去に前例のない、極めてチャレンジングな取り組みであります。どうかそのあたりもご評価いただき、今後の協議会の活動を見守っていただければと存じます。つたない司会でお聞き苦しかったと存じますが、以上でディスカッションを閉じさせていただきます。ありがとうございました。



閉会あいさつ

【司会：山田】 以上で、パネルディスカッションを終わります。ご清聴ありがとうございました。パネラーの皆さん、ありがとうございました。皆さんに改めて拍手をお送りください。

最後に、この講演会を共催いただきました、明治大学古代学研究所所長、石川日出志先生よりごあいさつをいただきます。石川先生、お願いいたします。

【石川】 皆様、お帰りの歩みを進めながら、少しだけお耳をお貸しいただきたいと思います。共催者として、明治大学日本古代学研究所代表、石川より御礼のごあいさつを申し上げます。本日は2階席までほぼ満席という、大変大勢の方にご参加いただきまして本当にありがとうございます。実情を話しますと、募集開始してすぐ、当初予定していた会場の収容人員を大きく超える方々からお申し込みいただいて、冷や汗をかきました。たまたまこの会場が空いていたのでよかった、そういう状態でありました。それだけ魅力的な内容であり、また皆様方の関心の高さからこういう状況になったのだと思います。金宇大先生の、大変刺激的な基調講演がありましたし、シンポジウムも大変面白いものでございまして、来年も、また再来年もですね、おそらくこの明治大学で、この研究成果発表をしていただけるものと思います。その際は、また皆様方、会場には限界がありますので、すぐにご応募していただいてご参集いただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。



【山田】 石川先生、ありがとうございました。以上をもちまして、第4回古代歴史文化講演会を終了させていただきます。当協議会は、来年、再来年も「古墳時代の刀剣」をテーマに講演会を予定しておりますので、ぜひまたご来場いただきますようお願いいたします。それでは皆様お気をつけてお帰りください。本日はご来場ありがとうございました。



司会：山田琴子（埼玉県立さきたま史跡の博物館学芸員）

図・写真出典・資料所蔵者

- 表紙【武寧王陵 単龍環頭大刀】韓国国立公州博物館蔵／【かわらけ谷横穴墓 双龍環頭大刀】鳥根県教育委員会蔵
- P.3 【亀の甲1号土壙墓 三累環頭大刀】金撮影、霧島市教育委員会蔵／【姉崎山王山古墳 単龍環頭大刀】金撮影、市原市教育委員会蔵／【岡1号墳 単鳳環頭大刀】金撮影、京都大学総合博物館蔵／【熱田神宮所蔵 伝和歌山出土獅嘴環頭大刀】金撮影、熱田神宮蔵／【高広Ⅳ区1号横穴墓 双龍環頭大刀】橋本英将（編）2009『もの・ワザ・情報—古の匠に挑む—古墳時代金工品の復元』元興寺・元興寺文化財研究所 より引用／【群馬・平井地区1号墳 象嵌装円頭大刀】・【茨城・伝舟塚古墳 金銅装円頭大刀】大阪府立近つ飛鳥博物館 1999『金の大刀と銀の大刀——古墳・飛鳥の貴人と階層』より引用／【兵庫・文堂古墳 頭椎大刀】森下章司・西村秀子（編）2014『兵庫県香美町村岡 文堂古墳』図版篇 大手前大学史学研究所・香美町教育委員会 より引用／【天馬塚 単鳳環頭大刀】韓国国立慶州博物館蔵
- P.4 【製作工房の系統整理案】大谷晃二 2011『金鈴塚古墳の金銀装大刀はどこで作られたか？』『金鈴塚古墳展—甦る東国古墳文化の至宝—』木更津市郷土博物館金のすず pp.18-23 を改変
- P.5 【龍院里1号石槨墓 単鳳環頭大刀】韓国国立公州博物館蔵／【玉田M3号墳 双龍鳳環頭大刀】・【皇南大塚南墳 三累環頭大刀】国立大邱博物館 2007『韓国の刀』より引用／【朝鮮半島各地の装飾付大刀出土地地図】大谷晃二 2006『龍鳳文環頭大刀研究の覚え書き』『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2004 年度共同研究成果報告書』財団法人大阪府文化財センター pp.145-164／【伝福井正田出土 銀装素環頭大刀】金撮影、敦賀市教育委員会蔵／【馬甲塚実測図】池炳穆・李柱憲 2002『咸安馬甲塚』学術調査報告 第15輯 国立昌原文化財研究所・咸安郡 の図面を再トレース
- P.6 【宮山古墳 銀錯金貼環頭大刀】金撮影、姫路市教育委員会蔵／【皇南大塚南墳】文化財管理局文化財研究所 1994『皇南大塚Ⅱ（南墳）発掘調査報告書』より引用／【武寧王陵】朴仲換・鄭相基（編）2006『武寧王陵出土遺物分析報告書（Ⅱ）』国立公州博物館研究叢書 第18冊 国立公州博物館 より引用／【藤ノ木古墳】奈良県立橿原考古学研究所 1995『斑鳩 藤ノ木古墳 第二・三次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会 より引用／【峯ヶ塚古墳】下山恵子・吉澤則男（編）2002『史跡古市古墳群 峯ヶ塚古墳後部発掘調査報告書』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 48 羽曳野市教育委員会 より引用／【北牧野2号墳】金撮影、滋賀県立安土城考古博物館／【安坪3号墳】金撮影、高崎市教育委員会蔵／【龍王山C-3号墳】金撮影、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館蔵／【龍の顔のパーツ名称図】朴仲換・鄭相基（編）2006『武寧王陵出土遺物分析報告書（Ⅱ）』国立公州博物館研究叢書 第18冊 国立公州博物館 の図を改変して作成
- P.7 【単龍・単鳳環頭大刀の型式変化図】新納泉 1982『単龍・単鳳環頭大刀の編年』『史林』第65巻第4号 史学研究会 pp.110-141 を改変。
- P.8 【一須賀WA1号墳】金撮影、大阪府立近つ飛鳥博物館蔵／【西堂古賀崎古墳】金撮影、伊都国歴史博物館蔵
- P.10 【玉田M3号墳 双龍鳳環頭大刀】韓国国立中央博物館蔵
- P.11 【綿貫観音山古墳 縦長板甕】小林孝秀（編）2012『東日本の古墳と渡来文化—海を越える人とモノ—』より引用／【才園古墳 十字文心葉形鏡板付甕】美濃口紀子（編）2016『黄金文化への憧れ』熊本博物館 より引用／【埼玉將軍塚古墳 棘葉形杏葉】小学館 2003『考古資料大観』第7巻 鉄・金銅製品 より引用／【善一田26号墳 三累環頭大刀】金撮影、大野城市教育委員会蔵／【宗小路19号墳 獅嘴環頭大刀】金撮影、静岡市埋蔵文化財センター蔵／【藤ノ木古墳 鐘形装飾付馬具】右島和夫・深澤敦仁・飯田浩光・森田真一（編）2017『海を渡ってきた馬文化—黒井峯遺跡と群れる馬—』群馬県立博物館 より引用／【海北塚古墳 心葉形装飾付馬具】小学館 2003『考古資料大観』第7巻 鉄・金銅製品 より引用／【藤ノ木古墳 円頭大刀】新津健・野代幸和・雨宮加代子（編）2001『黄金の輝き—古墳時代の金工品—』山梨県立考古博物館 より引用／【岩田14号墳 単龍環頭大刀】金撮影、赤磐市山陽郷土資料館蔵／【観音浦KS12号 三累環頭大刀】金撮影、宇美町立歴史民俗資料館蔵
- P.15 【太田天神山古墳 空撮写真】太田市教育委員会提供
- P.16 【剣崎長瀨西遺跡 方形積石塚（100号墳）・楕円形鏡板付甕・韓式系軟質土器・御布呂遺跡 小区画水田】高崎市教育委員会提供／【今城塚古墳 空撮写真】高槻市教育委員会蔵／【七輿山古墳 空撮写真】藤岡市教育委員会提供
- P.25 【堤連町1号墳】金実測／【下月隈天神森遺跡】飛高憲雄・力武卓治 1981『福岡市博多区下月隈天神森遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第76集 福岡市教育委員会 より引用／【それ以外の耳飾図面】野上丈助 1983『日本出土の垂飾付耳飾について』『藤沢一夫先生古稀記念 古文化論叢』古代を考える会 pp.237-292 より引用／【下北方5号墳】金撮影、宮崎市教育委員会蔵／【向山1号墳】金撮影、若狭町教育委員会蔵／【カンス塚古墳】金撮影、加古川市教育委員会蔵／【宮山古墳第2主体】金撮影、姫路市教育委員会蔵／【畔地1号墳】金撮影、飯田市教育委員会蔵／【江田船山古墳】新津健・野代幸和・雨宮加代子（編）2001『黄金の輝き—古墳時代の金工品—』山梨県立考古博物館 より引用／【一須賀WA1号墳飾履】金撮影／大阪府立近つ飛鳥博物館蔵／【藤ノ木古墳 飾履】新津健・野代幸和・雨宮加代子（編）2001『黄金の輝き—古墳時代の金工品—』山梨県立考古博物館 より引用／【鴨稲荷山古墳】金撮影、滋賀県立安土城考古博物館蔵／【三味塚古墳】斎藤忠・大塚初重・川上博義・鈴木尚 1960『三味塚古墳—茨城県行方郡玉造町所在—』茨城県教育委員会 より引用／【江田船山古墳 冠図】菊水町史編纂委員会 2007『菊水町史』江田船山古墳編 和水町 より引用／【鴨稲荷山古墳冠図】森下章司・高橋克壽・吉井秀夫 1995『鴨稲荷山古墳出土遺物の調査』『琵琶湖周辺の6世紀を探る』京都大学文学部考古学研究室 pp.81-97 より引用／【藤ノ木古墳冠図】奈良県立橿原考古学研究所 1995『斑鳩 藤ノ木古墳 第二・三次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会 より引用
- P.26 【大刀をもつ壁画・石棺線刻画】町田章 1976『環刀の系譜』『研究論集Ⅲ』奈良国立文化財研究所学報 第28冊 奈良国立文化財研究所 pp.77-110 より引用
- P.27 【釘崎3号墳 単龍環頭大刀】金撮影、八女市教育委員会蔵／【装飾付大刀の系譜】松尾充晶 2003『装飾付大刀』『考古資料大観』第7巻 鉄・金銅製品 小学館 pp.173-179 を改変
- P.28 【群衆墳の階層性】新納泉 1983『装飾付大刀と古墳時代後期の兵制』『考古学研究』30-3より転載／【地域ブロックと装飾付大刀分布】新納泉 2001『空間分析からみた古墳時代社会の地域構造』『考古学研究』48-3より転載
- P.29 【大刀系統図】大谷晃二 2016『金鈴塚の装飾付大刀』『第103 回歴博フォーラム 金鈴塚のかがやき』国立歴史民俗博物館より転載
- P.30 【井田川茶白山古墳 石室・大刀】亀山市教育委員会提供／【坂本1号墳 航空写真・大刀】明和町教育委員会提供
- P.35 【藤ノ木古墳 刀剣復元品】奈良県立橿原考古学研究所附属博物館蔵、図録より転載／【今城塚古墳 形象埴輪樹立状況・大刀形埴輪】高槻市教育委員会提供

第4回 古代歴史文化講演会 講演録

発行年月日 令和2年1月22日

編集 古代歴史文化協議会事務局（島根県古代文化センター内）

〒690-8502 島根県松江市殿町1番地

TEL：0852-22-6727 FAX：0852-22-6728

発行 古代歴史文化協議会 <http://kodairekibunkyo.jp/>